

---

# ASUKA ~ 鎮魂のノワール

タカユキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ASUKA 鎮魂のノワール

### 【Nコード】

N3408C

### 【作者名】

タカユキ

### 【あらすじ】

遙か昔、大天使ルシファーが神に反旗を翻し墮天使「サタン」となった。幽閉される前に人間「リリス」を身ごもらせ、自らの血を飲ませて魔人「ネフィリム」を誕生させた。神魔融合により絶大な力で世界を蹂躪したネフィリムは、7大天使との戦いによって二つに裂かれ、神の力を宿す二人の女性の中に封印された。西暦2015年、東京。16歳の高校生、神名飛鳥はネフィリムの中の神の力を宿していた。神にも悪魔にも追われ、誰一人味方はいない……。生きようともがく飛鳥の魂に共鳴して、徐々に力を発現していく飛

鳥の中のネフィリム。空前の力がぶつかり合うとき、世界が震えだす。

## FILE：0 プロローグ（前書き）

この作品は、私自身の勝手な解釈があり、一部宗教への冒涇ととられてしまいかねない記述もあるかとは思いますが、あくまでもフィクションとしてお楽しみください。

## FILE：0 プロローグ

「ちきしょう！なんだってこんな夜に！」

スコットランドヤードのアルバート警視は嘆いた。

クリスマスの夜。

近くの教会からミサの歌声が響いてくる。

今日は家族とミサに行った後、レストランで食事をする約束だった。仕事柄なかなか家に帰れない父親が、娘たちに名誉挽回する唯一の夜でもあったのだが、

教会に入る手前で呼び出しを受けた。殺人事件らしい。

娘たちのブライングを背中に浴びながら現場へやってきたアルバートは犯人よりも被害者を恨んだ。

“ よりにもよってクリスマスなんかには殺されやがって、何て間抜けな奴だ。俺の家族が崩壊したら貴様のせいだ！”

手袋をはめながらボヤキのひとつも言いたくなってくる。

現場は大通りから延びた細い道の突き当たり。幅は3メートルもないだろう。

「よう、アルバート！お互いついてないな。」

検死医のモーリスがアルバートを見つけ声をかける。

「娘たちがカンカンだよ。」

返事をしながら現場に近づいていく。

まわりを見渡すと、壁中に血が飛び散っている。

血の香りにむせかえるが、努めて冷静に振舞う。

「そうも言ってられなくなるぞ！」

「どんな具合だ、モーリス」

「ひどいな。これは難事件になるぞ。見るか？」

「ウツ・・・」

シートが捲られた瞬間、現場が凍りついた。

その死体は首から上と腰から下が引きちぎられていた。

そう、まさに「引きちぎられた」としか思えない凄惨な死体だった。局部の陰茎が勃起したままで、男だということがわかる。

「なんなんだ・・・これは！」

「詳しく調べてみないとわからないが、どうやら被害者は生きたまま引き裂かれたようだ。」

「まさか。」

「おそらく間違いないだろう。」

現場の捜査官たちが一同に声を失っている。それはそうだ。

人間業では考えられないからだ。かと言ってこの現場の狭さでは、機械など使えやしない。

ましてや大通りはすぐ目の前だ。こんな凄惨な殺人が起きれば、誰かしら気付いただろう。

「警視！」

通りの方から部下のマイヤーズが近付いてきた。

「なんだ？」

「本部から連絡です。大変なことが・・・。」

「何があった？」

マイヤーズは顔面蒼白だった。

「・・・このこと同じような死体が、ロンドン市内だけで4体発見されています。」

「何っ？」

「しかも、パリやモスクワ、ローマ、北京でも同様の事件が起こっているようです。」

言葉を失うアルバートのそばにモーリスがやってくる。

「どういうことだ？」

「警視！」

すぎるような目でマイヤーズが見つめている。言葉がなかなか出て

こないようだ。

「全ての都市で、現地時間の19時、同時に同様の殺人が起こっています……。」

凍りつく現場に白い雪が降り始めた。

FILE：1 運命

「飛鳥！あんた鈴宮先輩振ったんだって？」  
クリスマスイブである。

2学期の終業式も終わり、飛鳥がちょうど校門を出ようとしていた時、小学校からの親友である由佳が背後から抱きつきながら問い詰めてきた。

「だって、僕今そういうの興味ないし・・・恥ずかしかったし・・・

」  
顔を真っ赤に染めながら、小声で言い訳するのが精一杯だ。

神名飛鳥は16歳の高校生。聖友学園高校の一年生だが、入学してすぐ学園のアイドルになった。

身長は156センチと小柄だが、芸能界のアイドル顔負けの容姿で学園中の男子生徒を虜にしている。

何故か彼女の瞳の色は深緑。まるでエメラルドのようで、その目で見つめられたら誰もが吸い込まれるように感じてしまう。

かといって、良くありがちなツンデレではなく、究極の恥ずかしがりやで、そのギャップゆえ、さらに人気が高まってしまっていた。

そのうえ、お兄ちゃん子で兄の真似をするうちにしゃべり方が男子言葉になってしまったことも魅力に拍車を掛けているようだ。

だが不思議なことに、そんな飛鳥は女子にも人気があった。ほっとけない感じがするようだ。

「またー。 “僕” じゃなくて “私” でしょー！」

由佳は飛鳥の言葉遣いをいつも直そうとする。

「あ、そうだった。ごめん・・・。」

「まいつか。 だけど鈴宮先輩を振るなんて、うちの女子生徒の半数は敵に回したわよ？」

由佳は飛鳥の耳元で囁くように言った。



鈴宮先輩とはサッカー部のエースストライカーで、学園だけではなく県内にまで人気があるスターである。

飛鳥にとつては別に恋愛対象とは思っていなかったのだが、昨日の帰り道に公衆の面前で告白されたのだった。そんな状況で告白する方もする方だが、生来の恥ずかしがりやが出てしまい、「ごめんなさい！」と叫びながら鈴宮を突き飛ばして逃げてしまったのだ。

「だって、あんなにたくさんの方がいる前で、あんなこと言われても困っちゃうよ。僕、鈴宮先輩のこと何とも思っていないんだよ……」

「まあ、あなたの理想は“お兄ちゃん”みたいなひとだからね……」

飛鳥の両親は、飛鳥が12歳の時に自動車事故で亡くなっていた。両親は会社を経営していたが、突然の不幸に10歳違いの兄の神名陽が大学を中退して跡を継ぎ、親代わりとなつて飛鳥を育ててくれたのだ。そんな兄を飛鳥は尊敬し、慕っていた。

「飛鳥！由佳！」

同級生の真奈美と美樹が、二人を見つけて駆け寄ってきた。

「飛鳥。テストどうだった？」

真奈美が聞く。

「学年で1位だって。いつもどおりよ。」

由佳が変わりに答える。

「あんだ相変わらずだね。羨ましいよ。」

「ホント！その優秀さと美貌の半分でも分けて欲しいよ。」

「飛鳥のファンの男の子も半分分けて欲しいな！」

いつもの掛け合いだが、飛鳥はそんな言葉でも恥ずかしさで真っ赤になる。

「そんなことないよ……」

「こんなことで真っ赤になっちゃうんだから、可愛いよね。だから私も好き……！」

「私も!!」

真奈美と美樹まで抱きついてくる。

両親が亡くなつたとき、一緒になつて泣いてくれた大切な親友だった。

悲しいとき、嬉しいとき、いつも一緒にいてくれた大切な友達。奥手な飛鳥を守つてきてくれた存在だった。

「そういえば昨日、飛鳥のことを聞いてきた男の人がいたよ。」  
歩きながら、美樹が唐突に言い出した。

「あ、私も今朝聞かれたよ。」

真奈美まで。

「わたしも昨日声かけられて、飛鳥のことを聞かれた。もしかしてすごい美形の人じゃなかった?」

由佳も会つたようだ。

「そうそう、すごい美形!」

「でも、飛鳥の事知つてるみたいだったよ。ちょっと長髪で、凄い綺麗な顔してた。20歳くらいじゃないかな。飛鳥知ってる人?」

考えてみるが、そんな男には会つたこともない。

「知らない……。なんで僕のこと知ってるんだろう?」

「新手の美形のストーカー?」

みんながはやし立てる。

「神名飛鳥さん!」

いきなり背後から飛鳥の名を呼ぶ声がした。

いつせいに振り返ると、みんなの視線の先に男が立っていた。

肩くらいまで伸びた黒い髪、鼻筋の通つた涼しげな顔。

身長は・・・かなり高い。180センチはあるだろうか。しかし、いまだき流行らない真っ黒なコートのようなものを着ている。まるで教会の神父のようだ。

「飛鳥、あの人だよ。飛鳥のこと聞いてきた人。」

由佳が耳元で小声で教えてくれる。

「少し話をさせてもらいたいんだけど、いいかな？」

男が飛鳥へ、というより他の三人に聞くように話しかけてきた。

「えっ……。」

飛鳥の顔が真っ赤になる。それを見ていた由佳たちは顔を見合わせ  
てニヤリとしながら

「はいはい。お邪魔虫は退散します！」

「飛鳥！頑張って！」

「大切に扱ってくださいね！」

由佳が男の方に飛鳥を押しやった。

「あ、待ってよ由佳……。」

「飛鳥、明日報告してね！」

由佳たちはそう言い残して立ち去ってしまった。

(男の人と二人つきりなんて……無理だよー！)

とまどい、耳まで真っ赤にした飛鳥の元に男が歩み寄る。

「こっちへ……。」

男は急に飛鳥の腕をつかみ、強引に引っ張っていく。

「痛いっ！」

飛鳥が訴えるが、男は構わず飛鳥を引っ張っていく。

狭い路地に入り、袋小路になったところでいきなり男は手を離し、

飛鳥を壁の方へ押しやった。

行き止まりの壁を背にして、飛鳥は戸惑っていた。

いきなり愛の告白をされることはよくあったが、こんな風に強引に  
引っ張りまわされることは初めてだった。

(どうやって断ろう……。こんな強引にされて逃げられるのかな  
?)

そう考えていたところで、男は信じられないような言葉を吐いた。

「すまない。君には罪は無いが、僕は君を殺さなければならぬ」

「えっ？」

(殺すって・・・何?)

飛鳥が戸惑った刹那、男はコートの中から短剣を抜いて、飛鳥に向けた。

短剣の柄には十字架のクルスが巻きつけてあった。

「なんで?なんで？」

頭の中が真っ白になる。叫びにならない声が飛鳥の口について出る。

「訳は知らない方がいい。君の為だ。」

男は徐々に間合いを詰めてくる。切っ先を飛鳥に向け、目の前に立つ。

後ろへ逃げようとするが、すぐに壁に阻まれてしまった。

「神の御許へ・・・」

そうつぶやいて、男は短剣を飛鳥の左胸めがけて突き立ててきた。

飛鳥は胸の前で腕を交差させ、必死に防御しようとする。

声も出せない。

(殺される・・・)

そう思った瞬間、目の前が閃光に包まれた。

「ゲッ!!」

飛鳥のクロスさせた腕から閃光が走り、男が跳ね飛ばされた。

「なに・・・？」

尻餅をついた男は、啞然として飛鳥を見つめている。

そのとき、路地の上のベランダから悲鳴が上がった。

「人殺しー!!」

光を見て外をのぞいた女性が、短剣を持った男を見て悲鳴を上げたようだった。

「チッ!!」

男は立ち上がって短剣を納め、足早に立ち去っていった。

「今のは・・・何？」

腰から崩れ落ちる飛鳥。しかしここにはいけないと思い、よろよろと立ち上がり、駆け出していった。

飛鳥の自宅は学校から電車に乗って2駅ほど離れた場所にあった。帰り道、あの男がいないか周りを気にしながら、なるべく人通りの多い道を通った。

空は暗雲が立ち込め、突然雨が降ってきたが、構わず足早に自宅へ帰り着いた。

瀟洒な洋館。両親が飛鳥たちに残してくれた家だったが、兄と二人では少々広すぎる。

玄関を開けると、ちょうど兄の陽が帰ってきたところだったようだった。

「おかえり、飛鳥。」

「ただいま。」

飛鳥は自分の取り乱した様子を必死に隠して笑顔を作り、陽に答えて自分の部屋へ階段を駆け上がった。いった。

「？」

飛鳥の様子をおかしく感じた陽は、飛鳥を追って部屋の前へ来て声を掛けた。

「飛鳥、何かあったのかい？」

「え？なんでもないよ・・・」

とほいうものの、自分の声が震えているのがハッキリわかった。

「なんでもないわけないだろ？俺にも話せないことなのか？」

陽には話しておいた方がいいかなと飛鳥は思った。いつでも飛鳥の味方になってくれる兄だった。

部屋のドアを開ける。

「・・・お兄ちゃん。あのね・・・」

まだ声が震えている。

びしょ濡れの飛鳥の姿を見て、陽は飛鳥に提案をした。

「ちよつと待った。シャワーでも浴びて落ち着いておいで。そのあとゆっくり話してごらん。」

こんなとき、陽の落ち着きに救われる。

「うん・・・わかった。」

シャワーを浴びて部屋に戻ると、陽はミルクティーとケーキを用意して待っていてくれた。

ベッドに腰掛けてケーキを頬張ると甘さが広がって、心が穏やかになってきた。

こういうところにも気がつく兄は飛鳥の自慢だった。

「さあ、落ち着いたら話してごらん。」

陽は飛鳥の勉強机の椅子に、背もたれを胸に当てて座った。

「うん。あのね・・・」

飛鳥は、学校帰りに会ったことを陽に話した。

いきなり殺されそうになったこと。刺されると思った瞬間に閃光が走り、男を跳ね飛ばしたこと。

話を聞いていた陽の顔が険しくなっていた。

「とうとう来たのか・・・。」

「えっ？」

陽のつぶやきに飛鳥は何か嫌な予感がした。お兄ちゃんは何かを知ってる？・・・。

「ちよつと待っていてくれ。」

陽は部屋を出て行き、少ししてから何かを持って戻ってきた。

飛鳥の横に腰掛けた陽は、飛鳥の首に、手に持っていたものをかけた。

「飛鳥。君の運命が動き始めたらしい。これを大切に持っているんだよ。」

それはペンダントのようだった。

十字架と、何かタグのようなものが付いている。

「運命？」

「いいかい、飛鳥。君の身に危険が降りかかったら、これを持ってスイスモーリス銀行の東京本店に行くんだ。これを見せれば係の人が案内してくれる。」

陽の口調に緊張感が漂っているのが見て取れる。

「お兄ちゃん、何があったの？僕、怖いよ……。」

「大丈夫。きつとこのペンダントが飛鳥を守ってくれる。」

陽は飛鳥の肩をギュッと抱きしめて言い聞かせるように囁いた。

「うん。わかった。」

不安ながらも兄に心配させまいと、飛鳥は精一杯の笑顔を見せた。

「じゃあ、おやすみ。」

陽は飛鳥を安心させるように微笑み、部屋を出て……行こうとしたその時だった。

『目覚めよ！我が血を継ぐ者よ！』

まるで地の底から聞こえるようなおぞましい声が、飛鳥にもハッキリ聞こえた。

「何？」

「逃げろ！飛鳥！」

陽の叫び声に我に返った飛鳥は、陽を見た。

ドアの手前で苦しそうに頭を抱え、苦しそうにうずくまる陽の姿をみつけ、駆け寄る飛鳥。

「お兄ちゃん、どうしたの？」

「俺に構わず早く逃げろ！でないと俺は……ぐはあ……」

飛鳥は目を疑った。今目の前にいる陽の姿から、黒いオーラのようなものが吹き出している。

「ぐわあっ……！」

次の瞬間、飛鳥は黒いオーラに跳ね飛ばされ、ベッドの横に倒れこんだ。

顔を上げた飛鳥の目に飛び込んできた陽の姿に絶句する。

「お兄ちゃん！？」

ドアの前に立つ、黒いオーラに包まれた陽の姿が原型を留めないほど変形していく。

皮膚を突き破るように尖った耳が現れ、くちばしが伸び、背中からはまるで蝙蝠のような、いや、悪魔のような黒い羽が生えてきた。まるで中世の教会の彫刻のガーゴイルのようだ。

その異形のものが近付いてくる。まるで悪魔だった。

飛鳥は腰が抜けてしまつて動くことができない。

「お兄ちゃん……。」

さつきまでの優しかった兄の姿とは思えなかった。

「お兄ちゃん……。」

言いかけた瞬間、飛鳥は強い力でベッドの上に跳ね飛ばされた。

「いや……。」

飛鳥の上に怪物がのしかかってきた。そして、飛鳥のパジャマを引き裂いた。

「イヤッ、やめて！」

抵抗も虚しく、ブラジャーやパンティーまで引きちぎられていく。次の刹那、怪物の股間に勃起した異形の陰茎が見て取れた。

「イヤーっ！！！」

四肢を拘束され、飛鳥は身動きが取れない。

怪物の長い舌で、飛鳥の豊満な乳房が舐りまわされる。

必死に抵抗を試みるが、圧倒的な力で抑え込まれてしまっている。

飛鳥の秘所に怪物の陰茎が触れ、挿入されそうになった。

「助けて！お兄ちゃん！！！」

そう飛鳥が叫んだ瞬間、悪魔の動きが止まった。

『飛鳥……。僕を殺してくれ……。』

頭の中に陽の音が響いてきた。見上げると怪物の動きが止まっている。何かに逡巡しているように見えた。

「お兄ちゃん？」

一瞬、飛鳥の腕を押さえつける力が弱まったように感じた。その時、

『我が意思の元に！』



地の底に響くような声が再び聞こえてきた。

「ギーッ！」

怪物は叫び声を上げ、黒いオーラが再び強くなり、腕の力が増した。再び陰茎を挿入しようとし、飛鳥の秘所に触れた。

飛鳥の意識が飛んだ。その瞬間、飛鳥の意識の底流から白い閃光が溢れ出す。

「イヤッ！！！」

飛鳥の目が赤く光り、体が白く強烈な閃光に包まれた。その光が怪物を包み、跳ね飛ばしていく。

「ギャッ！！！」

声にならない叫び声を発しながら、怪物の姿が消え去っていく。かすかに残る飛鳥の意識の中に、陽のいつもの優しい声が響く。

『ありがとう・・・飛鳥・・・』

どれくらい時間が経ったのだろう。

ベッドの上に全裸で横たわる飛鳥。

(夢・・・?)

体中から力が抜けてしまい、なかなか動き出すことができない。

「お兄ちゃん・・・。」

声に出そうとするが、呂律が回っていない。

どうにか手を目の前にかざし、握ってみる。すこしづつ力が戻ってきた。

「お兄ちゃん、どこ？」

起き上がりながら再び声に出してみた。

そして、目の前の光景が飛鳥に驚愕の事実を知らしめた。

ベッドの足元の壁にもたれている陽の姿は元の姿に戻り、全裸で腰の部分から真つぶたつに引き千切られ、壁には血しぶきが飛び散っている。

飛鳥の瞳孔が開く。

「イヤーツ!!」

黒い雲が晴れ、真っ赤に染まった月が姿を現した夜の帳に、飛鳥の絶叫がこだました。

## FILE：2 使命

「その少女の命を絶って来て欲しい。」

クリスマスから遡ること1ヶ月前のヴィア・ドロローサ聖教会の深奥にある会堂。

神官である麻生勇一は十字架の前で長老会議を取り仕切っていたロマノ大司教から驚くべき指令を受け、戸惑っていた。

その手には一人の少女の写真と資料が広げられている。

フランスの山岳地帯中腹の、人里離れた小さな村にその教会は、その村の小ささに似つかわしくない大きさを誇って建っていた。

表向きは普通のローマカトリックの教会であったが、実はイエスの時代から続く宗派・熱心党の流れを汲む秘密結社アニウス・デイの総本山となっていた。

教会の会堂は、正面にイエスの十字架を配し、その前には広間が広がっている。

勇一は広間の真ん中に置かれた椅子に腰掛けて、アニウス・デイの長老会議に参加していた。広間の左右には一段高い位置にカウンターのような台がしつらえてあり、アニウス・デイの長老が左右に6人づつ座っていた。

「・・・どういうことですか？」

信じられないという気持ちを抑え、勇一は言葉を発した。

「我がアニウス・デイの成り立ちは知っているな？」

ロマノに促され、勇一が答える。

「はい。熱心党の教義を受け継ぎ、世界を魔の者より守るための使命を定められた教団です。」

熱心党とは、イエス・キリストの時代に荒野に住みながら禁欲的な

生活を送り、他のユダヤ教宗派と対立を続けたエッセネ派クムラン宗団の流れを汲み、イエスに洗礼を授けたバプテスマのヨハネの教団を支えた一派である。

ユダヤ教徒のローマ帝国からの独立を熱心に望み、紀元66年には第一次ユダヤ戦争を指導したが、追いつめられて死海のほとりにあるマサダ砦に立てこもり、自滅した。

しかし、その戦いに生き残った信者たちが組織を再結成し、秘密結社化することにより現在まで歴史に名を現すことなく教えを守ってきた。それが秘密結社アニヌス・デイ（神の子羊）であった。

熱心党にはかつて、イエスの十二使徒のうちシモンと、イエスを銀貨30枚で裏切ったといわれるイスカリオテのユダが所属していた。

「よろしい。」

「それと、少女を殺すことこの理由とは、繋がることなのでしょうか？」

勇一は当たり前の疑問を口にした。

ロマノは勇一に、というよりも会堂にいる他の長老たちに向かって語りかけた。

「それは、2000年の昔から我らに与えられた使命である。今、この世に悪魔サタンが復活せんとしている。その鍵を握るのがその少女だ。」

他の長老がそれに応える。

「その少女が魔の者たちの手に落ちれば、世界は再び神と魔の戦いに陥るだろう。」

「左様。そうなつては神と魔の力関係は拮抗し、世界は壊滅的な状況になるじゃろうて。」

その言葉をロマノが引き継ぐ。

「そのためには、その少女が魔の手に落ちる前に、命を絶たねばならない。君はそのために選ばれ、今まで修練を重ねてきたのだ。云わば君の宿命である。」

逡巡する勇一。自分が今まで修行を積んできた理由が、少女の命を絶つことにあった事実には戸惑っている。

「戸惑っている時間は無いのだ。己の使命を全うせよ。」

「それは、神の御心ですか？」

勇一は苦しそうに尋ねた。

「そうとってもらってよい。」

勇一の傍らに来たロマノは、決心を促すように勇一の肩に手を置いた。

「・・・わかりました。使命を果たします。」

（仕方ないのだ。世界を守るために・・・）

自分に言い聞かせるように、勇一は答えた。

そして立ち上がり、イエスの像の前でひざまずき、祈った。

「キリエ・エレイソン（神の御心のままに）」

ロマノが祈る勇一の背中に向かって言葉をかける。

「キリエ・エレイソン」

他の長老たちも続く。

祈る勇一の手握られた写真には、神名飛鳥が微笑んでいた。

今、勇一は郊外の教会に入り込み、神に懺悔していた。

飛鳥の殺害を失敗したこと。そして、いざと言う時に躊躇してしまつたこと。

そして今までのことを思い巡らせていた。

神は土の塵で、自分の姿に似せて人型を形作り、その鼻に息を吹き入れられた。そうして人間アダムを御造りになった。

神は“アダム”が一人でいるのを嫌い、獣や鳥を作つてアダムに披

露したが、人の相手としては共に暮らせなかった。

そこで神はアダムを眠らせ、そのアバラ骨の一部を抜き取り、その骨で女エバ（命）を造り、アダムに与えた。

しかし、実は神はアダムと同時に女を作りだしていたのであった。

その名をリリスと言った。

リリスはアダムと折り合いが悪く、それを不憫に思った神はリリスを地に降ろし、代わりにエバを作りアダムにあてがった。

そしてその頃、神の右腕でもあった大天使長が、神の支配に疑問を抱き、反逆した。

その名をルシファアといった。

ルシファアに賛同した他の精霊たち魔の軍団と、大天使ミカエルを軍団長とした神の軍団は、数百年に渡り、壮絶な戦いを繰り広げた。戦いに敗れたルシファアは墮天し、地上に住み着いた。

そして、ルシファアは神によって地に墮とされたリリスと交わり、子を成した。

その名をネフィリムといった。

ルシファアはその子に乳ではなく、自らの血を与えた。

神によって作られたリリスと、魔のルシファアの子であるネフィリムは、神と魔の力を併せ持ち、強大な力を持った。

絶大な力を持ったネフィリムを擁したルシファアは、悪魔の王サタンを名乗り、再び神に反旗を翻した。

世界はネフィリムの前に蹂躪されたが、ミカエルら神の軍団の捨て身の攻撃に合い、ネフィリムは神の力と魔の力の二つに分断され、戦いに敗れたサタンは地獄の最深部に幽閉された。

勇一が幼い頃から聞かされてきた、アニユス・デイの伝承であった。麻生家は昔から神を守護するアニユス・デイの神官の家系にあった。幼い頃から、悪魔祓いや体術を修練し、いつか自らの使命を果たす

ため研鑽を積んできた。

今、サタンが復活せんとしている。

にわかには信じがたい話ではあったが、自らの手で少女の命を絶たねばならない自分の運命を呪わずにはいられなかった。

そんな気の迷いが、最初のコンタクトを失敗に導いたのかもしれない。

「主よ、これが本当にあなたの御心なのですか？」

十字架の上のイエス像に向かって勇一は語りかける。

勇一は飛鳥の内に秘める力の片鱗を垣間見た。

確かに大司教の言われる通りなのかもしれない、見たことも無い力だった。

しかし、飛鳥の放つ光に触れた瞬間、邪悪なものは感じられずむしろ暖かさを感じたのも事実であった。

(俺が殺そうとしたあの子は魔の者ではなかったのか?)

勇一の中で、この疑問がどんどん大きくなっていった。

その時、教会の中に月の光が差し込み十字架を照らし出した。

まるでイエスが浮き出てくるような錯覚にとらわれる。

(主の試しなのか……)

その光景を目にした勇一は立ち上がり、教会を後にした。

FILE : 3 彷徨

「こりゃあ酷いな……。」

横山が呟いた。

警視庁捜査一課のベテラン刑事でも、こんな凄惨な現場は見たことが無かった。

女性の悲鳴が聞こえたとの通報が入り、所轄署の警官がここ、神名家邸に駆けつけた。

家には誰もいないようだったが、玄関の鍵が開いていたので確認の為に家の中を搜索したところ、2階の部屋で兄・神名陽の死体が発見された。

しかも腰の部分から真つ二つに切断された状態であった。

切断？というよりもまさに“引き千切られた”という表現が適切であった。

（こんなことが出来る人間がいるのか？）

その答えは全く導き出せなかった。

「横山さん！」

コンビを組む、新米刑事の高山が部屋に入ってきた。

「ウエツ！！」

死体を見るなり吐き気を催したらしい。

（お約束だな……）

自分が新米の頃も同じようになった経験があったが、氣遣ってやる余裕はなかった。

落ち着きを取り戻した高山が手帳を開いて報告する。

「ガイシャは神名陽、25歳。この家の世帯主で、神名貿易という会社を経営しています。」

「25で社長？随分やり手なんだな。」

「あ、いえ、ガイシャは2代目でして、創業は彼の父親です。その父親と母親は4年前に自動車事故で亡くなっています。4年前から会



社を継いだようです。」

(呪われた一家だな……。)

横山は被害者を哀れに思った。

「家族構成は？この部屋はどう見ても男の部屋ではないからな。」  
部屋の中にはぬいぐるみが数体飾られ、カーテンはフルル付き。どう見ても女性の部屋だった。

「妹が一人います。神名飛鳥、16歳。現在は聖友学園高校に在籍しています。この部屋は神名飛鳥の部屋になります。」

高山は手帳のページを捲りながら答える。

なぜ、妹の部屋で兄が全裸で死んでいるのだろうか？しかも尋常ではない殺され方で……。

「その“あすか”ちゃんは今どこにいる？」

「それが……。」

「どうした？」

「通報者は、女性の悲鳴を聞いて指令台に通報したということですが、現場に最初に到着した所轄署の警官は神名飛鳥の姿を見かけていないとのことです。」

「……。」

遺体を見る限り、女性の力では為し得ない状態だった。いや、人間業とも思えなかった。

しかし、神名飛鳥が兄の死体を見たのは確かなようだ。犯人とは思えなかったが、どちらにしろ、保護して事情を聞かなくてはならないだろう。

ふと時計を見ると11時を回っている。

「高山！機捜に連絡して、神名飛鳥を重要参考人で手配しろ！」

「はい！」

高山は慌てて部屋を出て行った。

(こんな光景を見たら、尋常な状態ではいられないだろう。早く保護しないと……。)

室内を見回しながら横山は思った。

ふと、机の上の写真たてに目が留まった。

どうやら神名家の家族らしい。愛くるしい笑顔で微笑む飛鳥を中心に、両親と兄が写っていた。

「クリスマススイブだったのに・・・」

そう呟いた横山は、飛鳥の不幸を思った。

飛鳥は街中を彷徨っていた。

周りをクリスマススイブを謳歌するカップルが行きかっている。

しかしそんな周りの景色も、今の飛鳥の目には入らなかった。

不意に遠くからパトカーのサイレンが聞こえてきた。

条件反射のように、ビルの間逃げ込んでいく飛鳥。

奥へ進むと、非常階段があった。

飛鳥は階段にたどり着くと、力が抜けたように座り込んだ。

（あれは何だったの？）

ほんの数時間前に、自分の身に降りかかったことを思い出していた。

飛鳥の秘所が、異形のものに姿を変えた陽に貫かれようとした瞬間、飛鳥の体が白い閃光に包まれた。

（ありがとう、飛鳥・・・）

その言葉と共に、光に包まれた怪物の姿が陽に戻り、消えていった。その瞬間、暗闇に飛鳥は浮かんでいた。

「ここはどこ・・・？」

体を越そうとするが、動かない。

不安ばかりが広がってくる。

ふと人の気配がした。人？いや、なんだかわからない。

しかし、懐かしい暖かさを感じた。

「誰？」

目を凝らしてみる。すると、なにやら人型に光るものが飛鳥の右脇

に近付いてくる。

「誰？誰なの？」

不安に駆られた飛鳥の声は震えていた。

「我は汝自身である。」

その敵かな声を聴いた瞬間、不安感が取り除かれていった。

「私自身？」

「そう、我は汝と共にある。」

「どうということ？」

まだ現状が把握できない飛鳥は問いかけてみた。

「汝が生きることを望むならば、我は汝を助けよう。」

「助ける？」

「生きる戦いを選ぶならば、汝に我の力を与えよう。」

「戦うって・・・誰と？」

「汝の魂を望む者。」

飛鳥は何のことも全く理解が出来なかった。

自分が命を狙われてる？でも確かに今日、殺されかけた・・・。

ふと兄のことを思い出した。

「お兄ちゃん・・・お兄ちゃんは？」

その瞬間、飛鳥の体の回りを更に数対の光の人型が取り囲んだ。

先ほどより更に懐かしい暖かさだった。

(飛鳥・・・)

陽の声がした。今まで語りかけていた人型が、陽の姿に変わっていた。

「生きるんだ、飛鳥。僕たちのために・・・。」

「お兄ちゃん・・・。」

ふと左側にいた二体の人型に、飛鳥は頭を撫でられた。

懐かしい大きな手、そして白く柔らかな手だった。

「パパ？ママ？」

その二体は、4年前に亡くなったはずの両親だった。

「飛鳥・・・大きくなったね。」

懐かしい父の声だった。

「どうして？ふたりとも生きていたの？」

飛鳥は問いかけたが、答えの代わりに飛鳥の頭を撫で続けていた。

「生きるのよ、飛鳥。私たち、いえ、世界のために！」

言い終わると、両親と兄は更に強い光に包まれた。

「パパ！ママ！どこ行くの？お兄ちゃん？」

やがて目の前が閃光で包まれた。

気がつくとも自分のベッドに横たわっていた。

起き上がって、陽の無残な死体を見つけ、叫び声をあげた。

無我夢中で服を着て、家の外に飛び出した。

そこから先は覚えていなかった。気付いたら街中を彷徨っていた。

街中の喧騒も静まり、寒さが一段と体に染み入ってきている。

だんだん空が白み出していた。夜明けが近いようだ。

ふと冷静になって考えてみる。

今頃自宅には警察が来て、兄の死体を見つけているだろう。

「お兄ちゃん……。」

涙がとめどなく溢れてきた。

なぜ？お兄ちゃんを殺したのは私？

自問自答しても答えは出てこなかった。

（この先どうしたらいいの？お兄ちゃん……）

頭を抱えた瞬間、胸元で響く金属音に、ハッと我に返った。

（「いいかい、飛鳥。君の身に危険が降りかかったら、これを持ってスイスモリス銀行の東京本店に行くんだ。これを見せれば係の人が案内してくれる。」）

陽の言葉を思い出した飛鳥は、陽がくれたペンダントを握り締めた。

（お兄ちゃんの言うとおりにしてみよう。）

ビルの隙間から朝日が差し込んで、飛鳥の頬を照らし出した。

希望の朝か、絶望の朝か……。

飛鳥は立ち上がり歩き出した。

## FILE : 4 胎動

闇があつた。

すべてが闇だつた。地上で言う暗さとは違い、尚深い闇があつた。

その先に仄かに明かりが見える。

薄明かりの中に半裸の男がいた。

長く伸びた黒髪、鼻筋の通つた美しい顔、そして鋼のような肉体を持つている。

しかし、何故か仄かな銀色の光に輝く鎖で四肢を拘束されていた。

遙か太古に神に反旗を翻し、戦いを挑んだ悪魔王サタンであつた。

サタンとは墮天使ルシファーである。

ルシファーは神の右腕である大天使長の座にあつた。

人間の神への忠誠心を試す役割を担っていた彼は、アダムとエバの失樂園の原因を作つた。

しかし神の支配に疑問を抱いた彼は、神に戦いを挑んだ。

ルシファーに賛同した他の精霊たち魔の軍団は、大天使ミカエルを中心とした神の軍団と、数百年に渡り、戦いを繰り広げた。

これを第一次神魔戦争と言つた。

戦いに敗れたルシファーは墮天し、地上に住み着いた。

しばらくは地上での生活を謳歌していたが、やがて神によつて地に墮とされたアダムの最初の妻リリスと交わり、子を成した。

ネフィリムと名付けられたその子供は、神によつて造られ神の力を持つていたりリストと、魔の力を持つていたルシファーとの力の神魔融合により、お互いの力を併せ持っていた。

すなわち、神の力ではネフィリムを滅することは不可能となつた。

ルシファーはその子に乳ではなく、自らの血を与え、強大な魔力を与えた。

ネフィリムを擁したルシファアは、悪魔の王サタンを名乗り、再び神に戦いを挑んだ。

これを第二次神魔戦争という。

世界はネフィリムの絶大な力の前に滅亡の危機にさらされた。

しかし、ミカエルら神の軍団の捨て身の攻撃に合い、ネフィリムは神の力と魔の力の二つに分断された。

そして、その力をユダヤ12部族のうちの2部族の女性にそれぞれ封印された。

神の力で滅ぼすことの出来ないネフィリムを封じるにはそれしかなかったのだった。

戦いに敗れたサタンは地獄の最深部に幽閉された。

気が遠くなるほど長い間、サタンはここで幽閉されていた。

「王よ！」

声のするほうへ視線をやると、甲冑を来た男がやってくる。

「ベルゼバブか・・・。」

ベルゼバブと呼ばれた男は、サタンの繋がれた前へ進み出て跪いた。

「閣下のご指示通り、準備は全て整いました。」

「こちらも種を蒔いておいた。あとはネフィリムの復活を成すのみだ。」

「いよいよでありますね。」

サタンは虚空を見上げた。

「この地に幽閉されて気が遠くなるほどの時が過ぎた。まさか私がいまだ蠢いている事を」

平和ボケの神は知る由もないだろう。」

「閣下！号令を！」

サタンはベルゼバブの金色の髪に手を置き、言った。

「時は来た。我らの目的は、神の創造した全てのものの滅びである。全てを滅ぼし、この世を混沌とせよ。」

「ハッ！」

ベルゼバブは立ち上がると、再び闇の中へ消えていった。

「神よ。新たな審判の時だ。」

サタンは不敵に微笑み、呟いた。

そこは地底の神殿だった。

暗闇の中にほの暗く灯がともっている。

その灯のひとつひとつが照らし出す姿は、皆異形の姿であった。

「諸君！」

一際高い壇上から呼びかける声がして、魔の者が一斉に振り返る。

そこにはベルゼバブが立っていた。

横には黒い僧服を来た人間が立っている。

ベルゼバブは眼下を見渡し、ヒットラーの演説よろしく言葉を発し始めた。

「いよいよ我らが王より号令が下った。我らは再び神との戦いを始める。全ての滅びのために！」

「おーっ！！！」

魔族たちがいつせいに勝ちどきをあげる。

「我らの勝利のため、まずは王の子、ネフィリムの復活を！！！」

「おーっ！！！」

再び魔族たちが沸き返る。

ベルゼバブは魔族たちの喧騒を制した。

「しかしながら、今だ神との力関係は拮抗している。よってネフィリム復活までは表立って軍勢で撃つて出る訳にはいかない。まずは各師団で動く事となる。インキュバス

隊前へ！」

魔族の中から一団が前へ進み出た。

「お呼びですか？」

「インキュバスよ。貴殿に先陣をお願いする。」



「ハッ！」

先頭で頭を下げたインキュバスは、ガーゴイルの様な姿に、口に収まりきらない長い舌を持っていた。

ベルゼバブは光る玉をインキュバスに投げた。

玉の仲には女性の姿が映し出されていた。

「その少女の中にネフィリムの半身が眠っている。まずはその少女の精神を破壊し、眠れるネフィリムを開放する！」

「どのような手段を講じても？」

「どのような手段を講じてもだ！」

「ハッ！」

インキュバスはひれ伏した。

重なるようにベルゼバブが続けた。

「少女の名前は神名飛鳥だ。まずはその少女の身柄を確保せよ。」

FILE : 5 手紙

神名飛鳥はスイスモリス銀行の東京支店前に立ち、建物を見上げていた。

瀟洒な古い洋館を思わせる建物は、近代的なビルの建ち並ぶオフィス街にそこだけ別の空間を作り出していた。

恐る恐る中へ入ってみると、外観とは違い近代的な内装で驚かされる。

しかし、ちまたの銀行のせわしなさとは違い非常に静かであった。

ロビーでまごまごしている飛鳥に受付の腕章を付けた初老の行員が近寄ってきた。

「何か御用でしょうか？」

微笑みながら飛鳥に語りかける。

「あの・・・これを・・・」

飛鳥は兄からもらったペンダントを行員に見せた。

一瞬ハツとしたような表情を見せたが

「かしこまりました。私は当銀行の榎村と申します。どうぞこちらへ。」

榎村は優しく微笑んで、飛鳥をロビー奥の扉へ導いた。

とても重厚なその扉にはカードスキャンが取り付けられてあった。

榎村は手馴れた動作で胸ポケットからカードを取り出し、スキャナーに通す。

甲高いモーター音がして、ゆっくりとドアが開いていった。

「さあ、こちらへどうぞ。」

飛鳥は榎村の後をついていくと、後ろでゆっくりとドアが閉まっていく。

そのセキュリティの高さにさすがは世界で指折りの銀行だと変に納得する。

足元が間接照明で照らされた通路を歩いていくと、やがてエレベーターにたどり着いた。

それでもカードを使い、開いたエレベーターに乗り込む。

エレベーターはゆっくりと動き出した。中はほの暗い照明で、高級そうな装飾が施されていた。

（なんかすごい別世界・・・）

昨日まで普通の女子高生を謳歌していた飛鳥には、驚きの連続だ。

やがてエレベーターは静かに停止し、扉が開く。

目の前にはフカフカのカーペットが敷き詰められ、重厚な高級家具が並び、応接セットがいくつも配置されている、とてつもなく天井の高い空間が広がっていた。

その奥にはドアがいくつも並んでいた。

「すごい・・・」

「どうぞこちらへ。」

感嘆の声を上げる飛鳥に微笑みながら、榎村は飛鳥を導いた。

「はい・・・」

並んだドアの真ん中の部屋に招き入れられた飛鳥は、ソファアに腰掛け周りをきよるきよる見回していた。

部屋の奥にまた扉があった。

そこへ紅茶を持った榎村がやってきた。

「ここは当銀行に貸金庫をお持ちの方のみが入れる特別室になります。それ以外の方はたとえ一国の大統領や王族、そして警察も入ることは許されません。」

警察、という言葉にドキツとしたが、飛鳥は冷静を装いながら紅茶を口に運んだ。

昨夜一晚中街を彷徨って冷えた体には、温かい紅茶はこの上ないご馳走だった。

一気に飲み干してしまった飛鳥に微笑みながら、榎村はカップにもう一杯紅茶を注いでくれた。

「ありがとうございます。」

ちよつとがつつき過ぎかなと恥じ入りながら、榎村と目を合わす。

「神名さまとは御爺様の代からお付き合ひさせていただいておりま  
す。」

「そうなんですか・・・」

榎村の優しい物言いと、祖父まで知っている榎村に親近感を覚え、  
ほつとすると同時に涙が溢れてきた。

「大丈夫ですか？」

榎村は少し慌ててハンカチを差し出した。

「すいません・・・なんか少しほつとしちゃって。」

涙をぬぐうと、榎村は言った。

「では早速ご用件を済ませてしましましょう。こちらへ。」

奥のドアへ向かう榎村についていくと、ドアの横に読取装置のよう  
なものが付いていた。

「ネックレスをお預かりいたします。」

飛鳥は首からネックレスを外し、榎村に渡した。

榎村はネックレスのタグを読取装置にかざした。

すると扉の奥で機械が動く音がし始めた。1分位経って機械音が止  
まり、扉のロックが外れる音がした。

「この奥に神名様の貸金庫がございます。ここからはお嬢様お一人  
で入室していただきます。私は席を外しますので、中から持ち出し  
てこちらのお部屋でお確かめください。」

榎村は反対側のドアに向かい、こちらを向いて

「終わりましたらテーブルの上のボタンを押してください。お迎え  
にあがります。ごゆっくりどうぞ。」

榎村は微笑んで部屋を出て行った。

改めて飛鳥は扉を開ける。

中には箱が幾つか並んでいて、そのうちのひとつのランプが点滅し  
ていた。

光るランプに触ると箱が開いた。恐る恐る中を覗いて見る。

そこには高級そうな宝箱が入っていた。  
宝箱を取り出し、応接間に戻る。

ソファーに腰掛けて、箱を開けてみると、中にはキャッシュカードと封筒が入っていた。

カードをテーブルに置き、封筒を手に取ってみる。

宛名は書いてなかったが、封を切って中を覗くと便箋が2枚入っていた。

開けてみると懐かしい筆跡。母親の字だと飛鳥にはすぐにわかった。

「飛鳥へ。」

この手紙をあなたが読んでいるということは、お父さんもお母さんも、お兄ちゃんもあなたの前からいなくなってしまったということですね。

あなたを守ってあげられなくて本当にごめんなさい。

これからどうしたらいいのか、迷っていることでしょう。

これから、あなたの運命についてお母さんの知る限りのことを伝えます。

お父さんの神名一族と、お母さんの来宮一族は共に青森県の戸来という村の出身です。

そして、私たちは共に大昔に日本へとたどり着いたユダヤの民の末裔です。

私たちのその“血”が、大きな災厄だと、戸来神社の神主様から聞かされました。

あなたが生まれたことで、わたしたちは村の掟を破り、村にいることが出来なくなつたために東京に出てきたのです。

詳しいことは私たちにも分かりませんが、あなたの体の中に秘められた宿命があるのです。

神主様はことあるごとに私たちが気にかけて、私たちに起こるであろう運命について教えてくださいました。

おかげでこのような準備を整えることが出来ました。

飛鳥。

あなたは自分の、いえ人類の宿命と闘わなくてはなりません。辛い事ですが、あなたなら乗り越えてくれると信じています。

まずは戸来神社の神主様にお会いして、自分の運命を知ってください。

キャッシュカードの口座に、お金を残しておきました。秘密口座のカードなのでどこでも使えて、記録も残りません。

例えばあなたが逃亡の身になったとしても、あなたを助けてくれます。

最後に・・・

私たちがどんなになっても、お父さんもお母さんもあなたを産んで、あなたに出会えて幸せでした。強く生きてください。

お父さん

お母さんより

手紙を読みながら、頬を涙が伝った。

両親も兄も自分のために死んでしまったことがショックだった。

しかしそれでも飛鳥の身を案じてくれた家族に、飛鳥は嗚咽を堪え切れなかった。

ひとしきり泣いた。

行かなくてはいけない。

涙を拭くと手紙とカードを大事にポケットにしまい、テーブルの上

のボタンを押した。

程なくして榎村が部屋に入ってきた。

「もうよろしいのですか？」

「はい。」

飛鳥は懸命に笑顔を作った。

「青森県の戸来村つてご存知ですか？」

「はい。これから向かわれるのですか？」

「はい。」

「では出口までご案内しましょう。」

来た通路を戻り、外に出ると黒塗りの車が止まっていた。

「さあお乗りください。」

榎村が後部座席のドアを開ける。

戸惑いながら飛鳥は車に乗ると、ドアを閉めた榎村は運転席へと体を滑り込ませた。

「あの……。」

車が発進したが、不安そうにしている飛鳥をバックミラーで確認した榎村が飛鳥に語りかけた。

「今、首都圏の駅には警察が緊急配備を引いています。東京駅から電車に乗るのは難しいと思われるので、このまま宇都宮まで送りします。そこからなら大丈夫でしょう。」

「知っていたんですか？」

「ええ。今朝のニュースを拝見しましたので。」

兄の事件を知ってもなお、なぜ榎村は助けてくれるのだろう。

「なぜ助けてくださるんですか？」

「あなたのお爺様やご両親には大変お世話になりました。ご恩返しです。」

頼れる人がいないと思っていた飛鳥には、これ以上無い嬉しい言葉だった。

「ありがとうございます……。」  
涙が溢れた。

「さあ、戸来までは長旅です。今のうちにお休みになっておいてください。私に出来ることはここまでです。」  
車は首都高に乗り、東北道へ向かっていた。  
張り詰めていた気持ちが消え、飛鳥は眠りに落ちていった。



## FILE : 6 受難

ゴルゴタの丘に、十字架が3基並んでいた。時が西暦に変わって30年ほどの頃である。

冬が終わり、昼と夜が同じ長さになる頃であった。

その丘を遠くから涙を流しながら見つめる男が二人、佇んでいた。二人とも旅支度で身を固めていた。

やがて、決意を固めるかの様に帽子を深く被り直し、その場を立ち去ろうとする。

それは、十字架に磔になったはずのイエスと、裏切ったはずのユダであった。

時の大祭司カヤパの邸宅の間近にある僧院の広間に、イエス・キリストの弟子である12使徒が集まっていた。

その広間から奥に続く小部屋で、3人の男が謀議を行っていた。

「兄上。約束の時が迫っております。ご決断ください。」  
そう言つて一人の男が腰掛の上に座つている男に向かって話しかけた。

その二人は背格好から風貌がとてもよく似ていた。

まるで双子の様でさえあった。

「ヨセフよ。我が弟よ……。成さねばならない事とはいえ、そう簡単に決断できることではない。」

その二人とは、イエスとその弟ヨセフだった。

イエスにはヤコブ・ヨセフ・シモン・ユダという男の兄弟と、他に二人の姉妹がいたが、その中でもヨセフはイエスにとってもよく似ていた。

弟子達は、イエスの兄弟のうちヤコブにしか面識は無かった。

ヨセフが懇願するようにイエスに語りかける。

「新しい神との契約を断行しなければならぬ時です。そうしなければ、この世界に悪魔が蔓延る世の中になってしまいます。」

「しかし、その役目は元々私の肉体を使って成されるべき事であった。」

イエスは苦悶の表情で、搾り出すように言った。

「しかし、最初の契約の生贄はアブラハムではなく、その子イサクでありました。弟である私の肉体を以って成されるべきです。」

ヨセフは続けて答える。

「あなたには成すべきことが他にあるではありませんか。」

イエスの元に「東方で神と悪魔の子ネフィリムが復活しようとしている」という啓示が大天使ミカエルからもたらされたのは、つい数日前のことであった。

ネフィリムの復活は、ハルマゲドンを意味していた。

自らの肉体を生贄とし、神との新たな契約を結び、教えを世界に広めようとしていたイエスの目論見がくずれてしまったのである。

神魔の子ネフィリムに対抗し得る者は、人の体を持って生まれた神の子、イエスを置いて他にはいなかった。

「あなたは旅立たなければなりません。」

ヨセフは決意を促すかのように、力強く言った。

「兄上の変わりに神に召されるのであれば、私は本望です。あなたの弟として生まれてきた私の宿命でしょう。」

「弟よ……。」

イエスはむせび泣いた。

ひとしきり泣き終わるのを、ヨセフは待った。

「さあ、世界をお救いください。」

ヨセフは晴れやかな顔で、イエスに向かって語りかけた。

イエスは腰掛から降り、ヨセフの腕を取った。

その顔からは決意が見て取れた。

「ユダよ。」

イエスは後方に控えていた男の名を呼んだ。

「おまえには辛い役目を与えてしまいが、成し遂げて欲しい。」  
進み出たユダも泣いていた。

「何の・・・主の苦しみから比べれば・・・。」

イエスは頷きながら答えた。

「さあ、行こうか。」

イエスはユダを従えて、大広間の方へと向かった。

イエスを12人の使徒が囲み、世に言う「最後の晚餐」が始まった。  
自らのパンを分け与え、ぶどう酒を分け与えた。

イエスの最後の教えであった。

そしてイエスは、教義の伝道を弟子たちに厳命した。

一番弟子のペトロを呼び、語りかけた。

「おまえに天国の鍵を預けよう。後の事は頼む。」

「主よ。なぜそのような事をおっしゃるのですか？私はどこまでもあなたについて行きます。」

しかしイエスは微笑みながら、問いに答えた。

「おまえは鶏が2度鳴くまでに3度私を知らないと言っだろう。」

ペトロは頑なに否定して見せたが、イエスはただ微笑むだけだった。

イエスにはもうひとつ謀らねばならないことがあった。

使徒12人は、自分と一緒<sup>ヨセフ</sup>に捕縛させるわけにはいかなかったのである。

彼らには、自らの教えを伝道する大切な役目があったのである。  
イエスは言った。

「今宵、おまえたちの中から私を裏切る者が出るだろう。」

一同は驚いた。

「それは誰なのですか？」

ペテロが聞いた。

「誰なのかは大事なことではない。その後の皆の振る舞いが肝心だ。」

「イエスは答えた。」

「おまえ達は何があるうとも嘘をついてはならない。」

一同がざわめく中、イエスは左隣に座していたユダの耳元で囁いた。

「ユダよ。為すべき事を為せ。」

ユダは目を閉じた。

しばしの沈黙の後、ユダは静かに宴から抜け出した。

イエスはしばらく、ざわめく弟子たちを眺めていた。

やがて決心するかのように大きく息を吐き、語りかけた。

「さあ、時は来た。行こう。」

当時のユダヤ教には宗派がいくつかあり、それぞれサドカイ派・パリサイ派・エッセネ派といった。

サドカイ派は最大勢力であり、ユダヤ教の神殿で行われる祭祀を取り仕切っていた。

主にユダヤの富裕層が属していた宗派であった。

そのサドカイ派に対して、清貧を主とするパリサイ派は貧困層に支持されていた宗派であった。

エッセネ派とは、どちらかというところ修行をして、神の叡智に近づくといい、仏教のような考えを持った宗派であり、イエスも幼い頃はエッセネ派の教義を学んでいた。

イエスを「ダビデの子」として一時救世主として担ぎ上げた人々もパリサイ派であった。

当時のユダヤはローマ帝国の支配下であり、このローマの支配から脱するために神から遣わされた救世主だと、ユダヤの人々は思っていた。

しかし、一向に立ち上がろうとしないイエスに、パリサイ派の民衆

は幻滅していた。

そこへ、自らの既得権益を守るうとするパリサイ派の指導者たちが民衆を扇動し、サドカイ派を巻き込んで、イエスを「神の子」を語る悪魔と喧伝し抹殺を図っていたのである。

僧院から抜け出したユダは、サドカイ派の大祭司カヤパの屋敷でカヤパと対面していた。

「決心がついたか。」

「はい。神の子を語る罪人イエスを引き渡します。」

ユダは震える声を隠すように早口で言った。

「その代わり、こちらの条件は飲んでいただけますね？」

「弟子たちはお咎めなし、ということだな？了解している。」

カヤパの元から司祭の一人が銀貨の入った袋をユダに手渡した。

「では、手筈通りに。」

袋を受け取ったユダは答えた。

カヤパはユダを伴い神殿に移った。

カヤパは神殿兵50人を前にユダを指し叫んだ。

「これから、神の子を語る罪人イエスを捕らえる。このユダが口づけをした男を捕らえよ。」

「ハッ！」

ユダと神殿兵たちは、神殿を後にした。

その頃、イエスたち一行はゲツセマネの園の森の中に場所を移し、休息を取っていた。

弟子たちが眠りに付く中、森の奥ではイエスとヨセフが衣服を交換していた。

「さあ、兄上。髪と髭をお落としく下さい。」

「ああ。」

イエスは倒木に腰掛けると、ヨセフが後ろからイエスの髪に手をか

けた。

長かったイエスの髪を切り落としていく。

身を委ねながら、イエスは涙を流していた。

「兄上、涙をお拭きください。あなたにはこれからもっと辛い戦いが待っているのですよ。」

ヨセフが優しく語り掛ける。

しかし、イエスはそのままだった。

「しばらくこうしていることを許しておくれ……。」

ヨセフはイエスの髪と髭の処理を終えた。

短髪にまとめ上げた髪型に帽子をかぶせた。

「さあ、一刻も早く、ここからお離れください。じきにユダが神殿兵を連れて参ります。兄上がそばにいては計画が台無しです。」

「わかっている。」

イエスはやおら立ち上がり、ヨセフの手を取って語りかけた。

「父の御許でまた会おう。」

ふたりは見つめあい、頷きあった。

「さあ、お行きください。」

ヨセフは手を振り解いて、森の更に奥へと向かっていった。

イエスはヨセフが見えなくなるまで見送り、その場を立ち去っていた。

イエスが立ち去って少し後、神殿兵を伴ったユダがゲッセマネの園へ到着した。

さすがに騒ぎに気付いた弟子たちは、数人がその場を逃げ出し、ペトロと数人が森の奥の倒木に腰掛けたイエスの元を集まった。

それはイエスと衣服を交換したヨセフであった。

その周りを神殿兵たちが取り囲む。

しばらく目を瞑り、黙想していたユダは、意を決したようにヨセフに近付き、その足に口付けた。

それを合図に神殿兵が一斉にヨセフを取り囲んだ。

「何をする！」

ペトロは剣を抜き、神殿兵に対峙した。

「やめなさい。剣を持つものは剣に滅ぼされる。」

ヨセフの一世一代の大芝居だった。その姿はまさにイエスそのものだった。

ペトロは剣を捨てた。

ヨセフは縄を打たれ、連行されていく。

それを見送るペトロに、ヨセフは振り向かずに行った。

「ペトロよ。為すべき事を為せ。」

ペトロは愚直な男だった。

カヤパの屋敷に連行されたイエス（ヨセフ）に会うために、屋敷に忍び込んでしまった。

しかしイエスを捕らえたということでも、嚴重な警備を敷いていたため、あっさりとつかまってしまった。

ペトロにはどうしてもイエスに確かめたいことがあった。

晚餐の時に自分に言ったイエスの言葉だった。

広間に連れて行かれたペトロは、カヤパの前に引き出された。

「おまえはこの男を知っているな？」

跪くペトロの前に、鎖につながれた男が立った。

顔を上げるペトロは驚きの表情を浮かべ、次の瞬間言い放った。

「この男を私は知らない……。」

確かにイエスにそっくりではあったが、長年師と仰いできたイエスを見間違うはずは無かった。

混乱するペトロ。

カヤパは更に追い討ちをかける。

「そんなはずはない。その男はお前の師であろう？」

「いえ、知りません。」

「嘘を付くな！この男は神の子を語るイエスであろう！」  
その瞬間、イエスの言葉が思い返された。

『おまえ達は何があるうとも嘘をついてはならない。』  
その瞬間、イエスの目論見に気付いたペトロは叫んだ。

「私はこの男を知りません！！」

次の瞬間、時を告げる鶏の鳴き声が2回、響き渡った。

泣き崩れるペトロを、カヤパは屋敷の外に放り出すように指示した。

門の外に出ると、ユダが待ち受けていた。

「どういふことなのだ？」

ユダを問い詰めるペトロ。

ユダはペトロに計画のすべてを話し、この後に起こるであろうことの処理を託した。

この後、身代わりとなったヨセフは磔となり、神への生贄として召されること。

イエスの復活を装わなければならないこと。

イエスがハルマゲドンを防ぐために東方に赴かなくてはならないこと。

イエスの教えを世界に広めないと、悪魔が蔓延る世の中になってしまふこと。

そのことをペトロに語った。

ユダはペテロにカヤパから受け取った銀貨を渡し、ヨセフの亡骸の処理とイエスの復活の偽装を託した。

ペテロはイエスの意思を継ぎ、布教に邁進する事を誓った。

すべての準備を整え、ユダはイエスとの合流場所に向かった。

ヨセフが磔にされているゴルゴタの丘が見えた。

その悲しげな後姿にユダは声を掛けられずにいた。

どれくらい時が経っただろうか。

イエスはおもむろにユダに決意を語った。



「ヨセフの意思を無駄にしてはならない。私は必ず魔王を倒さなければならぬ。」

「はい。微力ながら私もお力添えをいたします。」  
涙を拭おうともせず、帽子を深く被りなおしたイエスはきびすを返して歩き出した。

遙か遠い日本を目指して……。

「状況がどんどん悪くなるな。」  
横山は資料を見ながら呟いた。

神名陽一の殺人事件特別捜査本部が所轄署に設置され、捜査会議が行われていた。

現在、都内の主要な駅・空港などに緊急配備が引かれていた。  
対象は妹である神名飛鳥。

最初は保護するための手配だったが、現状に残された指紋などの証拠や状況などから

犯人に近い重要参考人としての手配にならざるをえなかった。

横山には到底信じられないことであったが、第三者の目撃情報も無く、事件当時に陽一と飛鳥の叫び声が周辺住人によって聞かれていたことも、飛鳥の状況を更に悪化させていた。

（16歳の少女にあんな殺し方が出来るわけ無いんだが・・・。）

陽一の遺体は首と腰の部分で3つに分断されていた。

鋭利な刃物による切断ではなく、“引きちぎられた”状態であった。物凄い力で足と頭を引っ張らない限り、そんな状況になることは不可能に思えた。

そして、近所の住人や高校の同級生の誰に聞いても仲の良い兄妹だったという。

両親を交通事故で亡くし、大学を中退してまで親代わりのように慈しみ育てた兄。

そんな兄を尊敬し、理想の男性像とまで言っていた妹。

「とにかく保護してみないことには何も前進しないな・・・。」

窓から見える夕日に、横山は彼女の身を案じた。

\*

その頃飛鳥は八戸の駅に降り立っていた。

宇都宮から仙台へ出て、そこからはやてに乗り、八戸へ着いていた。ここから戸来へは青い森鉄道線の盛岡行きに乗り、剣吉駅からタクシーで移動することになる。

次の列車の時間まで時間があったため、少し駅前をぶらつくことと思いい、改札を出て駅前に向かった。

「キヤツ!!!」

階段を下りていると、背後から悲鳴とともに何かが落ちてきた。見ると女性が足首を押さえてうずくまっている。

「大丈夫ですか？」

飛鳥は女性に声を掛けた。

「アイタタ・・・」

右の足首を押さえて痛がっている。

「あ、ありがとう。少し我慢してれば大丈夫・・・痛っ・・・」

年は20代半ばくらいだろうか。見ると汗を掻いている。相当痛むのだろう。

「病院行きましょう。僕タクシーを呼んできます。」

言うが早いか飛鳥は近くのタクシーに向かって走っていった。

幸い駅の近くに大きな総合病院があつて、そこで診察を受けた結果軽い捻挫で一晩患部を冷やせば痛みは大分引くということだった。処置を済ませた女性は松葉杖をつきながら、待合室で待つ飛鳥の元へやってきた。

「ありがとう。おかげで助かったよ。」

舌を出しながら照れ笑いで飛鳥に話しかけた。

その人はとても美しい顔をしていた。

女性は飛鳥の横に腰掛けた。

「私は森山あかね。あなたは？」

「あ、僕は神名飛鳥です。」

「いい名前ね！本当に助かった。飛鳥ちゃんは旅行？」

飛鳥の荷物を見て、聞いてきた。

「あ……、はい。これから戸来というところに。」

「また随分面白いところに行くね。SF好きなの？」

キリストの墓があるという説もある戸来である。そう思われても仕方が無い。

「はい。不思議なことが好きで……」

なんとなくそういうことにしておいた方がよいと思って、同調しておいた。

「どこに泊まるの？」

「まだ決めてないんです。」

あかねは何だかワクワクしているように見えた。

「何泊の予定？」

「それも……決めてないんです。」

「じゃあ、うちに泊まらない？」

「えっ？」

驚いてあかねの顔を見る。

「私、ここから戸来へ向かう途中で小さい牧場をやってるんだけど、足がこんなになっちゃったでしょう？仕事を少し手伝ってくれたら何日でも泊まってってくれていいからさ。」

「でも……ご迷惑じゃ……」

申し訳なさそうにする飛鳥を見て、あかねは畳み掛ける。

「と言つか……逆にお願い!!」

あっけらかんと手を合わせる仕草をするあかねに、飛鳥は吹き出した。

確かに泊まるどころを全く考えていなかった。もう6時を回っていた。

「じゃあ、お言葉に甘えて……。」

「よし、決まりね！早速だけど、タクシー捕まえてきてくれる？」  
会計に名前を呼ばれて立ち上がったあかねはそわいって支払いに向かった。

飛鳥もタクシー乗り場へと向かった。

7時を回った頃、あかねの牧場に着いた。

あかねが言うように小さい牧場ではなく、敷地自体はとても大きいものだった。

ログハウス作りの母屋は2階建てで、併設していた牛舎も3棟あり、サイロは5つもあった。

タクシーを降りた飛鳥はあかねの荷物を持って、あかねの後を付いて行く。

家に入ると、あかねは早速暖炉に薪をくべて暖を取る。

「そこ座ってて。」

暖炉の前のソファを指定され、そこに座る飛鳥。

あかねは松葉杖を突きながら器用に食事の支度をこなしていく。

食事はパンとシチュー、それにチーズとサラダ。

どれもとてもおいしかった。

食事の後、ふたりは暖炉の前に移動して、語り始めた。

「あかねさんってこんなに綺麗で、料理もとても上手なのに……」

旦那さんはいないの？」

「また随分直球で来るねえ。」

笑いながら飛鳥の肩を小突くが、次の瞬間ふと少し表情に陰りを帯びた。

飛鳥もここ数日でそういうことに敏感になっているようで、自分でも驚いていた。

「いろいろあってね、男の人がちょっと恐いんだ。」

さすがに昨日からの話はしなかったが、ふたりはいろいろ語り合った。

「暖炉の火って不思議。見つめているとすぐ心が癒されるんだね。」

昨夜の出来事もまるで夢のように思えてくる。

「……。」

あかねは様子を伺うように飛鳥を見つめている。

「何？」

「ね、飛鳥ってブラコンでしょ？」

「へ？」

「この世で一番好きなのはお兄ちゃん！  
顔が真っ赤になる飛鳥。」

「わかりやすいね、飛鳥は。」

「でも……。」

「もちろん、男性としてではないだろうけど。お兄ちゃんに全幅の信頼を置いてるって感じ。」

「どうしてわかるの？」

あかねは微笑みながら解説を続ける。

「だって飛鳥って僕ちゃん言葉だもん。これってお兄ちゃん大好き少女がよくなる癖なんだよね。」

話しながら飛鳥を見ると、頬を涙がつつたっている。

「ごめん。ひどいこと言っちゃった？」

「ううん。そうじゃないの。」

慌てて否定する。

「お兄ちゃん、この前死んじゃって……。」

「……ごめん。思い出させちゃったかな。」

バツが悪そうにするあかね。

「ううん。ちよっと思い出したただだから、大丈夫。ごめんね。」

「……寝よつか。」

「うん。」

寝室に移動すると、ベッドが二つ並んでいた。

「明日はバリバリ働いてもらおうかな!!」

「うん。初めてだから楽しみ。」

「よろしく!従業員様!おやすみ!」

「おやすみなさい。」

明かりが消える部屋を、外の木の上から見守る影がひとつあった。耳まで裂けた口に長い舌。

その姿はインキュバスであった。

「この藁はここでいいの？」

「うん。そのまま投げ込んでいけばいいから！」

飛鳥はあかねの牧場の手伝いをしていた。

施設の規模のわりに、運営は小さな所帯だった。

乳牛が20頭、馬が2頭。しかし、一人で切り盛りしていくのには精一杯の規模らしい。

飛鳥は朝から飼葉を牛や馬に配り歩いていた。

あかねはといえば、その間に牛舎を清掃し、今は搾乳の準備をしている。

捻挫した足は杖が無くても歩けるようだ。

仕事が一段落した飛鳥は、あかねのそばに行き搾乳を眺めていた。

「牛乳っていつもただ飲んでたけど、こういう風に集めてたんだ。」

乳牛の巨大な乳房にあてがわれた搾乳機が高いモーター音をうならせ、白い液体を搾り出していく。

「あとで絞りたてを飲ませてあげるから、もう少し待っててね！」

「うん。」

ふと飛鳥はあかねの首筋に目が行った。

昨日は気付かなかったが、あかねの手首にケロイド状の傷があった。あかねが振り向いた瞬間、見ていたことを悟られた気がしてふと腕を後ろに組んだ。

「飛鳥ちゃん。もうすぐ終わるから外の空気でも吸ってきなよ。」

「うん。そーする。」

飛鳥は慌ててその場を離れた。

母屋に戻った飛鳥は、朝早かったことと昨日までの疲れからか、ソ



フアで寝入ってしまった。

どれくらい時が経っただろう。

目が覚めると、外で男女の話し声が聞こえてきた。揉めている様だ。悪いと思いつつ耳を澄ませてみる。

『いい加減腹決めるよ。お前は俺のものになるしかないんだ。』

『悪いけど、私はそんなつもり全く無いわ。』

『おい！』

ドン！という大きな音がした。

『このままおまえを犯してもいいんだぜ。どうせここには誰もいないしな！』

男のいやらしい薄ら笑いが聞こえた。

飛鳥は慌てて外へ出た。

見るとあかねが男に壁に押し付けられて胸を揉まれていた。

二人が一斉に飛鳥を見る。

「来ちゃだめ！」

「チツ！客がいたのか。」

男はあかねを離れた。

「また来る。」

男は近くに止めていた車に乗り込み去っていった。

あかねに駆け寄る飛鳥。

「大丈夫？」

あかねは助かったというようなため息を吐き、微笑んだ。

「うん。ありがと。助かったよ。変なところ見せちゃったね。」

深呼吸をして、息を整えたあかねは飛鳥に言った。

「さ、絞りたての牛乳をご馳走しよう！」

「うん！」

「ちきしょう！あの人殺し女が！」

村の青年団の溜まり場で先ほどの男、柚木庄治が酒を煽りながら毒づいていた。

取り巻きの男たちが5人、庄治の周りで酒を飲んでいる。

「でも本当にあの女がお兄さんを殺したんですかね？」

一人の男が聞いてきた。

「駐在の話じゃ心臓発作だって言っていましたけど……。」

とたんに柚木は男の胸倉を掴んだ。

「心臓発作つてのは心臓が破裂するのかわ？」

「……。」

一同言葉も無く下を向く。

酒を煽ると柚木は話し出した。

「あの日は……。」

柚木庄治の兄、柚木精一はあかねの義理の父親だった。

森山家は元々この村で牧場を営んでいた。

あかねの父、森山明はなかなかのやり手で森山牧場を大きくしていき、最盛期には乳牛を100頭抱え、村の中で一番の規模にまでなっていた。

そんなやり手で、なかなかの二枚目でもあった明の元に、高校の同級生でマドンナでもあった母百合子が嫁いできた。

少々病気がちだった百合子ではあったが、明の献身的な働きもあり、幸せな家庭を築いていた。

そして両親が22歳の時にあかねを授かった。

たくましい腕っ節で仕事をこなしていく父、病気がちだが家庭のぬくもりを大切にしていた母に囲まれあかねは幸せな少女時代を過ごしていた。

そんな幸せもあかねが14歳の時に崩壊する。

ある日、父明が昼になっても戻らず従業員が牛舎に様子を見に行く  
と、牛に埋もれて倒れていた明を発見した。

状況から見て暴れた牛の群れに蹴り殺されたという見解を警察は取  
った。

明の頭蓋骨は陥没し、全身に蹴られたと見られる痣があった。

一家の大黒柱を失った森山家は徐々に経営に行き詰まり、牧場を手  
放さざるを得ない状況に陥った。

そこに現れたのが、村で代々村長を排出してきた名家の柚木家の精  
一だった。

精一は明や百合子の同級生だったが、昔から百合子に恋心を抱いて  
いた。

自分と結婚すれば牧場は手放さずに住むと説き伏せ、百合子と再婚  
したのだった。

再婚後、牧場は徐々に整理され半分ほどの規模になったが、何とか  
経営的には安定した。

しかし精一は昼間から酒を飲み、あかねの目の前でも百合子に迫り、  
組み敷いていた。

あかねはそんな精一とは極力距離を置いていた。

そして、百合子はそれらの心労がたたり、再婚後1年で亡くなって  
しまった。

16歳になったあかねは百合子譲りの美貌を兼ね備えていた。

そんなあかねを、同居する精一は欲望のまなざしで見っていたのだっ  
た。

5年前のその日。

あかねは干草倉庫で牛たちにやる飼葉の準備をしていた。

背後に気配を感じた瞬間、何かがあかねを押し倒した。精一だった。

「いや！何するの？」

「うるさい！おまえは俺のモノなんだ！」

精一は酒臭い息を吐きながら、あかねを組み敷いた。必死で抵抗するが男の力には叶わない。

「やめてよ！仮にも父親でしょ！」

その瞬間、精一はあかねの頬を平手で殴った。

「おまえは今まで一度だつて俺のことを父親と思ったことはないだろう！俺も同じだ。おまえを娘と思ったことなど一度も無い。あえて言うなら“犯したいオンナ”だ！」

言いながら近くにあった縄であかねの手首を縛り上げていく。

「いや、やめてー！！」

精一は構わずにあかねのシャツを引き裂き、ブラジャーを剥ぎ取った。

「抵抗する少女つても燃えるシチュエーションだな、フン。」

精一はあかねの発達した乳房を鷲掴みにし、荒々しく揉みしだきながら、片方の乳首に吸い付いた。

「ヒッ！」

あかねは声にならない悲鳴を上げた。

精一は手首の縄を柱に縛りつけ、あかねのジーンズに手をかけ、下着ごと剥ぎ取った。

「イヤーツ！」

あかねは干草の上に全裸で転がされた。

精一はあかねの足首を持ち、強引に広げた。

露わになるあかねの秘部にむしゃぶりついた。

初めて湧き上がる快感と、嫌悪感に気が狂いそうになる。

「やめて……」

涙がとめどなく流れてきた。あかねは気が遠くなってきた。

そんなあかねを見て、また征服欲が高まってきた精一は、あかねの足の間に無理矢理入ってきた。

「おまえのカラダは俺のモンだ。」

あかねの秘部に精一のペニスがあてがわれた瞬間、あかねは我に帰

った。

貫かれた瞬間、断末魔の悲鳴とともにあかねの意識が飛んだ。

「イヤーツ!!!」

あかねの意識の中から赤い奔流が溢れ出していく。

あかねの処女を奪った陶醉感で恍惚の表情を見せていた精一だったが、次の瞬間胸を押さええて苦しみだした。

「グツ・・・」

精一は口から一筋の血を流しながら後ろに倒れこんだ。

数刻後、所用で村の駐在と共に牧場を訪れた庄治は、牛舎で口から血の泡を吹いて絶命している兄の姿と、全裸で縛られて失神しているあかねの姿を目の当たりにした。

あかねの秘所からは赤い血の筋が流れていた。

駐在が咄嗟に自分の上着をあかねに掛け、精一の首筋に手を当てて脈を計る。

「兄さん・・・」

そのつぶやきに反応したのか、駐在は庄治を仰ぎ見て首を振った。

あかねは直ちに病院へと搬送され、続いて警察が現場検証を始めた。司法解剖の結果、外傷は特に無く事件性は無いものと判断されたが、不思議なことに

精一の心臓は破裂していたということだった。

状況的には精一があかねを強姦した上での腹上死としか考えられず、体面を気にした柚木家が森山家に対する債権をすべて放棄して、事件をもみ消していた。

しかし、庄治は牛舎での精一の死に顔を忘れることは出来なかった。それは何か世にも恐ろしいものを見たような顔をしていた。

庄治には、あかねが精一を殺したとしか考えることが出来なかった。そして同時に縛られ、全裸で失神していたあかねの姿が目には焼き付

き、あかねへの欲望が沸々と沸き続けていた。  
今でもあかねの白い肌、豊満な胸、くびれた腰、そして一筋の血が流れていた秘所を思い出すたびに怒りと欲望が庄治の心の中に黒い塊となつて渦巻いていた。  
悪魔が付け入るのに最適な状態であつた。

『犯せ！征服せよ！』

頭の中に声が響き渡り、庄治の中の何かが弾けた。

「おい、今夜あの女を襲いに行くぞ！」

「え？」

おどろく一同。

「おまえらだつてあの女をメチャクチャに犯したいだろ？」

「でも犯罪じゃ・・・」

「殺しちまえばバレやしないだろ！」

庄治の目に狂気が宿っていた。

庄治の目を見た一同は狂気を感じると共に、体の中に言いよつのような衝動が貫いた。

「へへへ、やりましょう！」

部屋の明かりに照らされた庄治の影に異形の姿が合わさつた。

その姿は色欲魔インキュバスであつた。

「私ね、昔から不思議な力を持っていたの。」

遅い夕食を採りながら、あかねは飛鳥に自分の話を切り出した。

時計は9時を回っていた。

「いつもではないんだけど、強く願うと物が動かせたの。」

「それって超能力っていうこと？」

「わからない。でもそうだと思う。」

チーズを切り分けながら、あかねは自分の幼い頃の話をし始めた。

「最初に気づいたのは6歳の時。近所でも評判の怖い犬がいて、あの時追いかけられたの。」

「大きかったの？」

「うん。ドーベルマンってやつかな。子供だったから尚更大きく見えてたかもね。」

で、追いかけて木に登って逃げただけ、その犬、木の下の吠え続けてたの。」

その光景を想像していた飛鳥はその恐怖感を共有できた。

「それで？」

「うん。怖くて怖くて夢中だったんだけど、その時近くにあった大きな石に当たっちゃえて願ったの。そしたら・・・」

「本当に飛んできた？」

「そう。握りこぶしくらいある石がその犬のお腹目掛けて飛んできたんだ。」

なんだか自分に似てると飛鳥は思った。

自分も身に危険が降りかかった時に不思議な力が発動した。

「で、それ以来不思議な力が備わったってわけ。」

「ふーん、すごいね。」

飛鳥は自分のことは言わないでおこうと思った。

「でもいつでも動かせたわけではないの。自分に危険が迫ったときだけ。」

あかねがそう言った時、牛舎から牛たちが騒ぎだした。

「何かしら？」

時計を見ると10時を回っていた。

「こんな時間にどうしたのかな。ちよつと様子見てくるね。紅茶でも飲んで！」

あかねはそう言って立ち上がり、牛舎へ向かった。

一人になった飛鳥は、あの夢を思い出していた。

あの暗闇の中に存在した大きな光る体。

その光は言った。

『我は汝自身である。』

『僕自身？』

『そう、我は汝と共にある。』

その光が自分を救ったのだろうか？

しかし、その後の言葉の意味がまだよくわからないでいた。

『汝が生きることが望むならば、我は汝を助けよう。』

『助ける？』

『生きる戦いを選ぶならば、汝に我の力を与えよう。』

『戦うって・・・誰と？』

『汝の魂を望む者。』

戦うということがよくわからなかった。

自分は何と闘わなければならぬのだろうか？

それを知るための旅でもあった。

その思考を切り裂くように、あかねの悲鳴が聞こえた。

「何？」



飛鳥は慌てて牛舎へ向かった。

「叫んだって誰も来やしないだろ！おとなしく犯られな！」

4人の男に手足を押さえられたあかねの上へのしかかり、庄治があかねの頬を叩いた。

「俺はあの日以来おまえを犯すことを夢見てきたんだ！」

言うが早いのか、庄治はあかねの上着を持っていたナイフで切り裂いた。

「いや！」

あかねも抵抗するが、大の男4人に抑えつけられ身動きが取れない。庄治はあかねのブラジャーに手をかけ、ナイフで切った。

あかねの白くて豊満な乳房が弾けた。

「ヒュー！」

「すげえ！」

周りの男たちから歓声があがった。

「まあ落ち着け、俺がやってから回してやる！」

あかねのホットパンツとパンティに刃をあてがい、一気に切り裂いた。

「いやーっ！」

全裸に剥かれたあかねの眼から涙がこぼれ落ちる。

悲鳴を聞いて駆け付けた飛鳥は、目の前の光景に思わず声を失った。

「やめなさい！」

慌てて近くにあった簾を手にとって、あかねに乗りかかっている庄治目掛けて殴りかかった。

しかし、所詮16歳の少女の力では大した打撃は与えられない。

「だめ、逃げて飛鳥！」

あかねが叫ぶ。しかし今の飛鳥には聞こえていなかった。

「あかねさんを離せ！」

「おいおい、もうひとり獲物が飛び込んできたぜ！」

「若いかなりの上玉じゃねえか！」

男たちが色めき立つ。

「お前らあつちを犯れ！」

庄治はあかねの足を押さえていた二人に指示を出した。

「じゃあ遠慮なく！」

踵を返してその男たちが飛鳥に襲いかかってきた。

「いや！」

あつという間に羽交い締めにされた。

「じゃあお先！」

「早いとこ回してくれよ！」

一人の男が飛鳥の両手首を押えて、もう一人が飛鳥の上ののり、飛鳥の胸を揉みしだきながら耳を舐ってきた。

途端に飛鳥の体に悪寒が走る。

それでも飛鳥は気丈にあかねの方へ目をやった。

あかねの上の庄治はやおらズボンを脱ぎ、いきり立ったペニスを露出した。

「へへへ、やっとおまえをモノに出来るぜ！」

庄治は自分のペニスをしごきあげながら目に狂気を孕ませて言った。

「10年前には兄貴と一緒におまえの親父を殺ったんだ。おまえの母親をモノにするためにな！おまえも犯った後に両親の元へ送ってやるぜ！」

その言葉に、放心状態だったあかねの意識が戻る。

その瞬間、庄治があかねの秘所にペニスをあてがう。

「いやーっ！！！」

あかねが叫んだ瞬間、あかねの胸から赤い光が発せられた。

その光が庄治の胸に繋がる。

「うっっ！」

庄治が胸を押さえて苦しみだした。

「あかねさん！」

飛鳥が叫ぶ。

しかし次の瞬間、庄治の体から黒いオーラが立ち上った。みるみるうちに体が変化していく。上着が破れ、上半身が盛り上がり、耳が尖り口は耳元まで裂けていく。

その姿はインキュバスであった。

鋭い爪を持った右手であかねのどに手をかけた。

「!!!」

「ふう、危ねえ危ねえ。この小娘、とんでもねえ力持ってやがる。その姿を見た他の男たちは怯みだした。」

「おいおい、おまえらもいつまでそんなカツコしてんだ。」

インキュバスの体から黒いオーラが伸び、男たちを包んでいく。次第に姿を変えていく男たち。

変身した姿は、あの時の陽の姿と同じだった。

「!!!」

「イヤー!!!」

あかねは初めて見る異形の者たちに悲鳴をあげた。兄の事を思い出し、飛鳥は一瞬ひるんだ。

「まずはおまえからだ！」

インキュバスの腕に力がこもり、あかねの首を絞めつけていく。

「ゲツ・・・」

「やめてー!!!」

必死に起き上がろうとするが、手足を抑えつけられて身動きが取れない。

「へへへ、おまえはあの女の最後を見ながら俺らに犯されるんだぜ。」

飛鳥は必死に首を伸ばし、あかねを見る。

あかねは首を絞められて手足が突っ張っていく。

あかねの胸の赤い光が徐々に輝きを失っていく。

「ダメーッ!!!」

その瞬間、飛鳥の中の鼓動が激しくなっていく。

飛鳥の体が白い光で包まれ、押さえつけていた悪魔たちが弾き飛ばされた。

「なんだあ?」

気配を察知してあかねから手を離れたインキュバスが振り向くと、そこには白いオーラに包まれた飛鳥が立っていた。

髪の毛は逆上がり、眼光は赤く光っている。

「おい、おまえらさっさと片付けろ!」

悪魔たちが一斉に飛鳥に襲い掛かる。

飛鳥は右腕を振り払った。するとその軌跡に白い閃光が走った。

「ハレ・・・?」

気が付くと、悪魔の姿は腹から真つ二つに切り裂かれていた。

「グエッ!!!」

悪魔たちの体が飛鳥の前に無造作に積みあがった。

その光景を目の当たりにしたインキュバスはやおら立ち上がり、飛鳥に対峙する。

あかねはその光景を薄れゆく意識の中で見ていた。

「何者だ、おまえ。」

「我が名はネフィリム。この者と共にあるもの。」

飛鳥の声とは思えない、低い声が響いた。

「ネフィリムなあ?もう発動していやがったのか・・・」

インキュバスは一瞬たじろいだだが、すぐに向き直った。

「あんたを解放するために俺は来た。今すぐその女の体から解放してやるぜ!」

言うが早いかインキュバスはその両手を伸ばし、飛鳥の両肩を掴み

自分の元へ引き寄せた。

「さあ、この女の体を俺のペニスで貫いた瞬間に目的は達せられる  
!!!」

飛鳥は俯いている。

「キャツハツハ！これで終わりだあー!!」

インキュバスの下腹部から異形のペニスが飛鳥の股間目がけて伸び  
てくる。

その時、ネフィリムが言葉を発した。

「残念だが・・・」

飛鳥が顔を上げる。

「あなた、許さない！」

その眼から赤い光は消え、声も飛鳥のものだった。

「グエツ！」

飛鳥の光る右腕がインキュバスのミゾオチあたりを貫いていた。

「おまえは？・・・」

ゆっくり腕を抜き取る飛鳥。

インキュバスははずると崩れ落ちていった。

立ち尽くす飛鳥。

「これがあなたの力・・・？」

「そう、汝の力でもある。だが、まだうまく我とコンタクト出来ぬ  
ようだ。」

インキュバスを見やり

「これが僕の敵？」

「そう。汝の魂の崩壊を望む者。そして汝の命を奪おうとする者も  
いるだろう。」

「なぜ？どうして僕はそんな目に遭わなきゃいけないの？」

飛鳥は泣き叫んだ。

「我を宿した宿命。」

飛鳥の中のネフィリムが答える。

「まずは己の意思で我を発動させるすべを身につけることだ。」  
「なぜ……。」

戸惑いが大きすぎてうまく言葉にならない。

ふとあかねの方に目をやると、全裸で気絶している。

「おねがい……。」

飛鳥は左手をあかねへ向けると白い閃光が走り、あかねの体が母屋のベッドへテレポートした。

続いて右手をインキュバスや悪魔の死体へ向けると、再び白い閃光が走り、

その死体は蒸発するかのようになんか消え失せた。

そして静かに、飛鳥は元の姿に戻っていった。

母屋に戻り、あかねの元へ行くと、あかねはまだ意識を失っていた。

布団をかけて、あかねの枕もとに椅子を運び座る。

あかねになんて説明すればよいのだろう……？

そんなことを考えるうち、飛鳥も眠ってしまった。

「飛鳥……。」

名前を呼ばれて目が覚めた。

あかねが目を覚ましていた。

「あかねさん……大丈夫？」

「うん。飛鳥こそ大丈夫？」

声は弱々しいが、意識はしっかりしているようだ。

「うん。僕は全然平気。」

「……あいつらは……？」

「あ……うん……大丈夫。いなくなった。」

「え？」

「消しちゃった。全部。」

「……。」

少しの沈黙が流れた。

やがてあかねが言葉を切った。

「飛鳥も重いモノを背負ってしまったているみたいだね……。」「あかねがあすかの頬を撫でる。

飛鳥は堰を切ったように涙が溢れ、今までであったことをあかねに話し始めた。

自分の生い立ち、陽とのこと、手紙のこと、自分の宿命を知るために戸来に行くこと。

そして自分に宿る強大な力のこと。

あかねは黙ってすべてを包み込むように聞いていた。

すべてを話し終えた時、あかねは眠りに落ちた。

もう朝日が昇っていた。

飛鳥はそれを見届けて、身支度を整えた。

庄治たちは行方不明ということで処理されるだろう。

可哀そうだが、元々はあかねの父親を殺した男である。

自業自得と思うしかなかった。

あかねにも口止めしておいた。

眠るあかねを見て、置手紙を残して飛鳥は牧場を出た。

「ありがとう。」

その一言だけで十分だった。

バス停で始発を待っていた。

穏やかな朝であった。

昨夜のことがまるで夢であったように思えてくる。

遠くからバスのエンジン音が聞こえてきた。

飛鳥はバスに乗り込み、一番後ろに座った。

ドアが閉まり、クラクションと共に走り出す。少し走るとあかねの牧場が見えてきた。

目をやると、柵のそばにあかねが立っている。

「あかねさん……」

窓をあけて身を乗り出し、手を振った。

「ありがとう！」

あかねも手を振り返す。

「飛鳥　！私も強くなる！だからまたここに帰っておいでー！」

二人とも涙が止まらない。

「バイバーイ！」

あかねは両手を振ってバスを見送っていた。

その左手には飛鳥の置手紙が握られていた。



『高天原を追放されたスサノオは、出雲国の肥河（斐伊川）の上流の鳥髪（とりかみ、現奥出雲町鳥上）に降り立った。川上から箸が流れてきたので、川上に人がいると思って川を上ってみると老夫婦が泣いていた。その夫婦はオオヤマツミの子のアシナツチとテナツチであった。夫婦には8人の娘がいたが、毎年古志からヤマタノオロチがやって来て娘を食べてしまった。今年もオロチのやって来る時期が近付き、このままでは最後に残った末娘のクシナダヒメ（櫛名田比売、奇稻田姫）も食べられてしまうので、泣いているのであった。

スサノオは、クシナダヒメを妻として貰い受けることを条件に、ヤマタノオロチ退治を請け負った。スサノオはクシナダヒメを守るためにその姿を櫛に変えて髪に刺した。そしてアシナツチ・テナツチに、強い酒を醸し、垣を作って8つの門を作り、それぞれに醸した酒を満たした酒桶を置くように言った。準備をして待っていると、ヤマタノオロチがやって来た。オロチは8つの頭をそれぞれの酒桶に突っ込んで酒を飲み出した。オロチが酔ってその場で寝てしまうと、スサノオは十拳剣を抜いてオロチを切り刻んだ。尾を切り刻んだとき、剣の刃が欠けた。剣で尾を裂いてみると大刀が出てきた。これは不思議なものだと思い、アマテラスにこの大刀を献上した。これが天叢雲剣あまのむらぐものちの草薙剣くさなぎである。』（ウイキペディア：ヤマタノオロチより抜粋）

正午を越えた頃、飛鳥は戸来に着いた。

戸来村とは今は平成の大合併で新郷という名称に変わっていた。

バス停の目の前にはちょうど町内の地図があったので、そこで戸来神社を確認し、向かった。

古めかしい鳥居を抜け、雪の降り積もった木立の間を抜けると、これまた古めかしい木造の神社が建っていた。

社殿の正面に立つと、垂れ下った幕には星型のマークがあった。神社には似つかわしくないものである。

「誰じゃ？」

背後から声がして、驚いたあすかは振り返った。

白い作業衣を着た老人がスコップを手に立っていた。

老人は飛鳥の顔を見て驚いた表情を見せた。

「・・・神名の娘か？」

「はい。神名飛鳥といいます。」

老人は大きくタメ息をついた。

「お主がここへ来たということは、事が始まったということか・・・」

「両親がこちらに行くようにと・・・。」

顔をあげて老人が飛鳥に向きなあった。

「ときに両親は元気かね？」

飛鳥は俯いて

「いえ、4年前に交通事故で亡くなりました。今日ここへ来たのは両親の遺言の手紙を読んだからです。」

「そうか・・・。」

老人の表情が一瞬険しくなったが、少しして、最初の頃より優しい口調で語りかけた。

「遠かったじゃろ。さあ中に入りなさい。」

老人は飛鳥を社殿の中に案内してくれた。

「わしは今野庄三郎、この戸来神社の禰宜じゃ。」

「ネギ？」

「要するに神主のことじゃ。」

社殿の真ん中で二人は対峙していた。

「父や母が神主さんに大変お世話になったと聞きました。」

庄三郎は遠くを見るような表情だった。

「別に何もしとりやせんよ。ただふたりが幸せになってくれればと願ってただけじゃ。」

庄三郎は飛鳥に向き直り、飛鳥の瞳を覗き込んだ。

「母御によく似ておる。さて、何から話そうか・・・。」

飛鳥にも茶を勧めながら自分も古びたゴツイ湯呑の茶を啜った。

「まずはおまえさんの両親の馴れ初めからかのお。」

「お願いします。」

庄三郎は軽く咳払いをした後、ゆっくりとした口調で語り始めた。

「そもそもおまえさんの母親、聖子の来宮家はこの土地の巫女の家系だった。来宮の家とわしは縁続きでな、聖子はわしの姪だった。

来宮の巫女は代々昔から未来を見通す力に優れておったが、聖子の中でもその力は図抜けておった。」

そういえば時折母に様々なことを言い当てられてビックリしたことがあった。

「そして父親の神名正和じゃが、神名家も代々当神社の神官だったのだが、3代前の神名正蔵、つまりおまえさんのひいじいさんじゃが、神官の地位を捨てて東京で事業を始めたのだ。あとはお前さんも知ってる通り神名家は東京の成功者になった。それ以来、戸来神社はわしの今野家が神官を務めておるんじゃよ。」

その話は父親からよく聞かされていた。

「今から24年前、正和は自分の由来である戸来に興味を持ち、ここへやってきた。確か大学生だった。そこで聖子と出会い、恋に落ちてしまったのじゃ。」

庄三郎はやおら目を瞑り、話を続けた。

「実は古からの戸来村のしきたりがあつて、来宮家と神名家は婚姻を結んではいけない決まりになっていたのじゃが、すでに戸来の人

間ではなかった正和はそんな事とは知らず、聖子を見染めてしまったのじゃな。周囲の大反対を押し切って駆け落ちをしてしまったのじゃ。」

老人は茶を啜った。飛鳥もなんだかのが渴いて茶を啜った。

「わしは聖子には信頼されておつての。逐一連絡が入っていた。長男が生まれたともな。しかし、わしもしきたりが気になって神社の古文書を調べてみたんじゃ。そして一つの結論に達した時、おまえさんが生まれたと連絡があつた。」

「結論つて……。」

老人は一呼吸おいて、目を見開き厳かに語った。

「神名家と来宮家の間に女兒が生まれることに問題があつたのじゃ！」

飛鳥は言葉を失った。やはり自分は呪われた子なのだろうか。しかし何故……？

「神の座を見てみよ。」

老人は神座を仰ぎ見た。飛鳥も続く。

「この紋は変わつておるじやろう。」

確かに普通の神社のそれではなかった。なにやら星のような形をしている。

「これは『ダビデの星』、または五彗星と呼ばれるもの。我々戸来古来の人間の先祖はユダヤの民なのじゃ。」

ユダヤ……。

歴史や地理の教科書で知ってるくらいだった。とてつもなく遠いところだということは知っていた。

でもなぜ、ユダヤの民が日本にいたのだろう。飛鳥は混乱していた。「我が神社に残る古文書によると、ユダヤの失われた12部族のうち2部族が、紀元前に日本にたどり着いたらしい。」

話しながら部屋の隅に行き、古びたノートを取り出してページを繰り始めた。

「その族長だった家系が神名家と来宮家だったのだ。」  
両親はあまり出身の戸来のことは話してはくれなかった。

何か苦い思い出があるのだろうと勝手に解釈していたが、はじめて聞く話に

少し戸惑っていた。

「聞かされてはいなかったかの。無理もない話じゃ。」  
老人はまた茶をひと啜りし、話を繋いだ。

「その時はまだ何もなかったのじゃ。事は紀元前も終わる頃の話から始まる。」

長い話じゃ。腹が減ったろう。食事の準備をさせておる。奥とふたりの寂しい食卓じゃ。

「ばあさんも喜んでおるよ。」

「え・・・」

外を見ると暗くなっている。時計の針に目をやると6時を回っていた。

「ありがとうございます。」

「小休止じゃ。続きは食事の後でな。」

社殿の奥には古いが大きい屋敷があった。

渡り廊下を通り、中に通されると大きな囲炉裏を囲んで食事の支度がされていた。

味噌のいい香りが漂ってくる。

なにやら懐かしい香り・・・。家族団欒・・・そんな言葉を思い出した。

「さあさあ、そんなところに突っ立ってないで早くお座り。」

とんと背中を押された。そのまま囲炉裏の前まで押し出された。

振り返ると老婆がニコニコしている。老人の妻らしい。

囲炉裏には鉄の鍋が据えられており、食欲をそそる匂いを放っている。

た。

「まったくあんたもあんな寒い本殿で長居させるかね。寒かったらうに。」

老人はポリポリと頭を掻いている。  
きつと妻に頭が上がないのだからう。

飛鳥の横に老婆が座り、鍋からお椀によそってくれた。

「さあ、おあがり。」

「いただきます。」

そういえば、昼からなにも口にしていなかった。

ひとくち啜ってみる。

ああ、こんなに暖かくて優しい料理を口にしたのはどれくらいぶりだろう。

「おいしい……。」

飛鳥の目から一筋の涙がこぼれ落ちた。

「あれあれ、私の料理はそんなにおいしいかね？」

飛鳥の気持ちを察したのか、老婆がおどけてくれた。

「はい、とつても！」

老人は熱燗を口にしながら笑顔で見守っている。

「さあ、どんどんお食べなさい。」

言ってから老婆は奥へ続きの料理を取りに行った。

妻がいなくなつたのを確認して、老人は

「魔の者に追われていたんだろう。ここは聖なる結界の中じゃ。安心して休むがいい。」

「はい。」

たしかにこの神社の敷地に入ったときから清々しい気分になっていた。  
た。

結界というのは本当だろう。

食事も終わり、心も体も癒されていた。

老人の妻は気を利かせて別の部屋に行ったようだ。

「さあ、今までであったことをわしに話してくれんか？」  
「はい。」

囲炉裏の火を囲みながら、飛鳥は今日までにあったことを話した。  
ある日見知らぬ男に殺されそうになったこと。

兄が変身して自分に襲いかかったこと。

その兄をその手で殺してしまったこと。

たびの途中で魔物に襲われたこと。

夢に出てきた両親、そしてネフィリムという存在のこと。

その間、老人はなにも問うことなく黙って聞いていた。

「そうか、おまえさんは神も魔も敵という訳じゃな。」

「。。。。。」

しばらく老人は思索しているようだったが、ふと時計を見て

「もう11時じゃ、風呂に入って疲れを癒すとよい。明日はおまえ

さんに教えなきゃならん事が山積みじゃ。」

「はい。」

「それと修行もな！」

「修行？」

「ああ、おまえさんが生きるために身につけなくてはならない最低限のことを修行せにゃならん。」

「はい。」

「では今夜はゆっくりお休み。おーい婆さん！」

隣の部屋から老婆がタオルや寝間着を持って入ってきた。

「さ、お風呂へ入りましょうか。」

老婆にお風呂に案内してもらい、普通の家にはあり得ないほどの広いお風呂に入った。

ちよつとした温泉宿くらいの広さの浴槽に浸かる。

どうやら温泉が引いてあるらしく、微かに硫黄の匂いがした。

今まで何かなんだかわからないままここまでたどり着いた。

ここに来て、自分の運命が特殊であることにも薄々感じられてきた。

今はすべてここの老人に頼る以外術がない。

「いまはすべてを任せるしかないんだな……。」  
まずは明日。

そう飛鳥は心に言い聞かせた。

「誰じゃ？」

夜遅くに訪ねてきた者がいた。

「お久しぶりです、御老体。」

玄関の土間に勇一が立っていた。

「こんな夜更けに何の用じゃ？」

「ここに女の子が訪ねて来た筈ですが。」

「何のことじゃ？」

「とぼけないでいただきたい。」

「……。」

老人は様子を伺っている。

「彼女を渡していただきたい。」

「……あの子を亡き者にする気が。」

「……。」

勇一をジロリと睨み付ける。

「ここにいる限り指一本触れさせんよ。」

「どうあっても？」

「お主もここで修行した身じゃ。ワシのことはよくわかっておるじやろつて。」

「……。」

老人は勇一を一喝した。

「なんならおぬし等神に仕える者と一戦交えてもよいのだぞ？」

「……。」

勇一は老人の剣幕に一言も返せずに俯いたままだった。

「もう二度とここには足を踏み入れなでくれ。」

一礼をして玄関から出ようとする勇一に向かって老人は声を掛けた。



「人殺しをさせるためにおぬしに法を授けた訳ではないぞ……。」「  
一瞬立ち止まった勇一はその言葉を噛みしめるように見えたが、そ  
のまま答えることなく戸を閉めて出ていった。

その後ろ姿を見やりながら老人は呟いた。

「あの子の意志に関係なく、世界は混沌に向かっていているようじゃ……。」「

そんな事は知らない飛鳥は、泥の様に眠っていた。

【10】

「まずはどこから話そうか。」

今野老人は静かに語りだした。

戸来神社の本殿の中央で飛鳥と老人は対峙していた。

昨夜はゆっくり眠れたおかげで、気分がスッキリしている。

「昨日はユダヤ12部族の話をしたと思うが、まずはそこから詳しく話そう。」

「はい。」

学校で世界史の授業では聞いたことはあったが、特に無宗教で過ごしてきた飛鳥にはあまりピンと来ないフレーズだった。

「はるか昔、旧約聖書で語られるような時代に、ユダヤ人が国を失ったことはおまえさんも学校で習ったろう。」

バビロン捕囚の話は覚えていた。

「その時、ユダヤ人は12の部族に別れ、世界中に散っていったんじゃない。そのうちの二部族がはるか東方の日本にたどり着いた。その流れを汲むのが、おまえさんの両親の神名家と来宮家。まあ、この村の古くからの住人はみなその血筋なんじゃが。」

「はい、母からの手紙にもありました。」

「うむ。そこに神魔戦争というものが絡んでくるんじゃない。」

「しんま・・・戦争？」

「はるか昔、大天使長ルシファーが神に対して反乱を起こしたのじや。最初の神との戦いで破れたルシファーは墮天した。つまり悪魔サタンとなった。」

昔読んだ何かの本に載ってたような記憶はあった。

「サタンは地上に降り、リリスと交わって子を成した。リリスとは、アダムの最初の妻。有名なイヴの前に奥さんがいたんじゃない。」

「アダムとイヴは知ってます。」

「うむ。アダムとリリスは神によって土から作られ、魂を吹き込まれた。神はアダムを中心に人の世を作るうとしたんじやが、同じ作られ方をしたリリスはこれが不満であった。

自分とアダムの力は同等だと主張し神に逆らったわけだ。神の逆鱗に触れたりリリスは地に落とされ、毎日出産し、そのうちの1000人の子を失う罰を与えられた。代わりに神はアダムの肋骨からイヴを作り、アダムのパートナーとしたんじやな。だから、女は男より力が弱い、そして男と女はひとつになることを本能とするようになったんじや。」

「.....」

「サタンは自分と交わることでリリスをその罰から解放した。ただし、そのサタンとリリスの間に生まれた子が問題じゃった。リリスは墮天とはいえ神の力を宿す者、そしてサタンは魔の力を宿す者。

その子供は神魔融合となり、神には殺せなくなった。そしてその子供にサタンは自らの血を乳の代わりに与え、強大な魔力を持たせたんじや。その名をネフィリムという。」

飛鳥は聞き覚えのある名前に愕然とした。

自分の中にある存在、確かネフィリムと名乗っていた。

「そう、おまえさんの中にある者の名じや。」

老人は溜息をついた。

「サタンはネフィリムを擁して再度神に戦いを挑んだ。第二次神魔戦争じやな。神と魔の力を併せ持つネフィリムの力は強大じゃった。そのころは人々の信仰が神から離れ、神々も疲弊しておったんじや。信仰の多さが神の力となるからな。あやうく世界が滅亡し掛けた時、天上の12天使が立ち向かった。辛うじて勝利を収めたが、先ほども言ったようにネフィリムは神によっても滅せられず大天使長ミカエルによって神と魔の二つに裂かれ、二人の乙女の体内に封印されたんじや。その二人の末裔が12部族の2部族に分かれ、日本にたどり着いた。神名と来宮じや。」

一気に話すとふうと息を付き、お茶をひと啜りした。

「おまえさんの話を聞いた限り、おまえさんの中にいるのは神の者だろう。」

飛鳥は混乱していた。

確かに、飛鳥の瞳の色はエメラルドグリーンに近く、よく友達に西洋人みたいだとは言われていたが、自分の来歴にそんな事実があったとは思いつかなかった。

母からの手紙にもあったとはいえ、まさに青天の霹靂というやつだ。「だいたいわかるじやろう。神名と来宮はひとつになってはいけないう家系だったんじや。」

老人は溜息をついた。

年端もいかない少女に告げるには過酷な宣告だったからである。

「そして長男が生まれた。そこまではまだよかったが、その後になんの子が産まれてしまった。しかも双子の女の子が。」

「え？双子？うちは女は僕だけです。」

自分が双子だなんて聞いたことがない。物心付いた頃から陽と自分の二人兄妹だったのだ。

老人はおや？という顔になった。

「聞かされてなかったのか。おまえさんには姉がおったんじや。」

「そんなこと、家族からは一言も聞いたことないです。」

「……。」

老人は思案顔になったが、意を決した様に語り始めた。

「両親が話しておらなんだか。よいか、おまえさんには双子の姉がおった。長男の次に双子の女の子が生まれたんじや。じゃが、生まれて間もなく病院から姉さんの方がさらわれたんじや。」

言いながら老人は神棚の横の棚からスクラップブックを取り出してページをめくりだした。

「おお、ここじゃ、ここを読んでみなさい。」

飛鳥はスクラップブックを受け取った。そこには古い新聞記事が貼ってあった。

記事には飛鳥たちが生まれた五日後、双子の姉が病院から誘拐されたと書いてあった。その後身代金など犯人からの要求もなく、事件の捜査が難航しているということだった。

「……。我らは幸いなことだと考えた。今までの話から考えつくとは思いますが、おそらくおまえさんの姉さんの中にはネフィリムの魔の者が潜んでおるじやろう。共に育つことを避けるためにどちらかを我らが引き取る事になっておったんじゃないが、その前に姉さんは誘拐されてしまった。」

考えてみると飛鳥には思い当たる節があった。

たまに怪我もしていないのに腕に切り傷のようなものができたり、病気でもないのにお腹が痛くなったりしたことがある。また、たまに夢の中で全く知らない風景の中に自分が佇んでいたりしていた。よく一卵性双生児には起こることと聞いている。

「どこか知らないところでその”お姉さん”が生きているんじゃないか？」

「おまえさんの中のネフィリムがおまえさんの中で滅していないところを見るとそうなんじやろう。」

老人は何か思案をするように目をつむり、答えた。

「このことはわしが古文書を読み解いた後に起こったこと。もう少し早くわかっていれば……。」

いきなり知らされた姉の存在。にわかには信じられなかったが、ふと会ってみたい感情が沸いてくる。

その表情を見て察したのか、老人が語り掛けた。

「会ってみたいと思っっているようじゃが、それは無理じゃ。二人が出会い、そこに魔の力が加わったら魔神の復活となる。」

「え？」

「魔神を復活させたいと思う者は、まずおまえさんの理性を奪おうと考える。宿す者の理性が消えた途端にネフィリムは発現する。魔の者のやり方としては、おまえさんを魔の者が犯そうとするじゃろ

う。発見したネフィルムは、片割れに吸収され、完全体となるんじゃない。」

たしかに、前に襲ってきた悪魔も、そして兄も、飛鳥を犯そうとしていた。

「逆に、神に仕える者はおまえさんを亡き者にしようとするじゃろう。姉妹のどちらかの命を奪えばネフィルムは復活できなくなる。」

「あ……。」

「そう、最初に襲ってきた者は神に仕える者じゃ。」

目の前が暗くなった。自分は神と悪魔両方に狙われている。そのうえ、おそらく警察にも追いかけられていると思う。

「どうして……。」

涙が止まらない。

無理もない。

つい数日前まで、普通の女子高生だったのだ。

なぜこんな運命の元に生まれてしまったのだろう。

老人は飛鳥がひとしきり泣き終えるのをじっと待った。

どれくらいの時間が経っただろう。

飛鳥が落ち着きを取り戻したのを見て、老人は静かに口を開いた。

「まだ希望が無いわけじゃない。その覚悟が出来るかどうかじゃ。」

飛鳥は顔を上げた。泣きはらした目が痛々しい。

「おまえさんには神の子の血も流れておるんじゃない。」

「神の子って？」

老人は諭すように、信じられない名前を語った。

「この世で唯一神の子といえば、イエス・キリストじゃ。」

イエスの身代わりにヨセフが十字架に掛けられてから5年が過ぎていた。

エルサレムを後にしたイエスとユダは倭の国、今の日本にたどり着いていた。

遙かシルクロードを東上し、今の朝鮮半島から出雲に入り、そこから日本海沿いに北上してきた。

通る道すがら、人々に友愛を伝え、またこの国の言葉も学びながら、今でいう岩手県の山の麓にたどり着いたのだった。

ユダヤの2部族がこの地にたどり着き土着していた。

「ここに魔神が復活しようとしているのか。」

草原の真ん中で眼前にそびえる山を見上げながら、イエスはユダに語り掛けた。

「そのようです。ユダヤの2部族を交わらせてはいけません。急ぎましょう。」

この時代、このあたりは鉄器の製造が盛んだった。ユダヤの民が持ち込んだ製鉄技術のおかげだった。

今でも南部鉄器としてその名残を残している。おかげで周りの部族との争いも優位に立ち、ユダヤの民は元からいた民と共に暮らし、新たな一族を築き東北一帯を支配していた。

「しかし、よりもよってなぜこの地に2部族が集結したのでしょうか？」

ユダがイエスに問いかけた。

「おそらくサタンの仕業であろう。」

「しかし、サタンは地の底に幽閉されているのでは？」

イエスは天を仰ぎながら息を吸い、吐き出しながら

「サタンの軍勢はいまだに力を持っている。サタンの指示ひとつで動く者も多い。そしてそれを助ける人もいる。」

「それは？」

イエスは目を瞑った。

「サタンは地上に落とされたとき、リリスだけでなくたくさんの人間の女と交わった。おそらく今この世界の半数はサタンの遺伝子を持っているだろう。その者はサタンの意のままだ。」

「……。」

「サタンの力で魔の者に変化するのも簡単なことだろう。この世界の半分はサタンの軍勢だと思ってい。」

「その者たちが手引きをしていると？」

「うむ。おそらくユダヤの民の中にも紛れているだろう。」

ユダは気を引き締めた。

おそらく気が遠くなるほどの壮絶な戦いになるであろう事は予想出来たからだ。

しかし、不安の方がムクムクと頭をもたげてくる。

この世の半分の悪魔を相手に自分たちはたった二人なのだ。

ユダの不安を感じ取ったイエスは言った。

「大丈夫だ。我らには天使の軍団もついているし、なにより私は神と共にある。」

言い放つイエスの横顔を仰ぎ見て、ユダは不思議と心が穏やかになっ  
ていった。

「参りましょう。」

ユダが先導するのを見ながら、イエスはもう一度大きく深呼吸した。まるで大地のエネルギーを吸い込むように。

そのまま川岸を山の方へ遡る。

一見、とても清々しい清流に見えるが、イエスはそこに漂う邪悪な  
思念を鋭く感じとっていた。



「少し遅かったかもしれない。」

「どうしました？」

ユダが尋ねる。

「ここから山頂に続く流れの中に、魔神の思念を感じる。どうやら完全体ではないようだが、もしかしたら片割れが覚醒してしまったのかもしれない。」

「なんですって……。」

ユダは背筋が萎縮するのを感じた。

魔神ネフィリムの事は、エルサレムから日本への道すがらいエスから聞かされていた。

強大な魔力、圧倒的な破壊力、神にも魔にも倒せない生命力。

思案顔のユダにイエスは声をかけた。

「心配するな、ユダよ。我ら天の軍団はすでに一度魔神を封印している。」

「……そうですね。急ぎましょう。」

ふたりが歩きだそうとした時、少し先で抱き合ったまま嗚咽している老夫婦を見かけた。

「どうしました？」

ユダが声をかけた。

男の方が顔を上げ、ユダの肩越しにイエスを見やると、驚いた表情で

「あなた様は……。」

「？」

「あなた様はもしかや遙か西方から来られた救い主様では？」

「なぜそれを？」

イエスは尋ねた。

「はい。我が一族の預言者が、この地を災いする邪悪な者からお救いくださる尊いお方が来られると御神託を受けておりましたので。」

ユダは老夫婦の肩を抱きながら

「そうです。このお方はまさに神の子、すべての者に祝福をくださるお方です。」

言いながら肩を抱く手に力を込めた。

「おお、おお……。」

二人はさらに嗚咽をあげながら、イエスに手を合わせ、ひれ伏した。「さあ、私に話を聞かせておくれ。」

イエスは起き直るようにし向けながら優しく語りかけた。促されて老父が口を開いた。

「はい。私はこの地の一族の長、アシナヅチと申します。そして妻のテナヅチ。我らはこの辺り一帯で平和に暮らしておりました。我らの一族もまた、あなた様と同じユダヤの民の末裔であります。」

「うむ。長きにわたり苦労したであろう。」

自らも辿った道程を思い返し、彼らの苦労が忍ばれた。

「で、今もって二人で泣いていたのは何故ですか？」

イエスは優しく問いかけた。

「はい。最近このあたりに邪悪な法を司る魔物が住み着きました。

私には娘が8人おりましたが、ひとり、またひとりとその魔の者にかどわかされていきました。我らも手を尽くしたのですが、その力強大にして狡猾で、どうにも歯が立たず、娘どもを取り返しに送った軍勢もあつという間に全滅してしまいました。」

イエスは目を瞑ったまま聞き入っていたが、ふと思いつくことがあつた。

「この地には我がユダヤの民の二つの部族がたどり着いたはずです。その部族は今？」

「はい。私と妻がそれぞれの部族の長として一緒になりました。」

「そうであつたか……。」

遅かった……。

元々は一つの魂、引き合ってしまったのだらう。もうすでにネフィリムの二つに分かれた魂がひとつになる準備が整つていた。

大天使ミカエルによって二つに裂かれたネフィリムの魂は、それぞれ

れユダヤの二人の乙女の中に封印された。

魔の者を封印するのに処女の体を使うのが定法だったのだ。

処女の神性がお互いの防御壁となり、魔神の再融合を阻むからであった。

しかしそのままその母体が子を産まないまま魂を失ってしまうと、純粋な魔神が半分とはいえ復活してしまう。

そのためにその後、その血を薄めるために子孫を残していくこととなったのだ。

それはその処女がその後男と契っても問題はなかったということだ。しかし、魔神の魂を宿した、この目の前の夫婦が結びつき子を生じてしまったため、魔神の血が復活してしまったのだ。

再び濃くなった魔神の血が、二人の娘の中で醸成される。つまり二人の娘は魔神の卵子と精子のようなものだ。

おそらくその8人の娘のうちの誰か二人の中に魔神は存在しているのだ。

「娘御は全員かどわかされてしまったのですか？」

老父が答える。

「はい、つい先ほど末娘のクシナダが我らを振りきって山に……」

「

振り切って？」

「はい。すべての娘がまるで夢でも見ているかのように変わり果て、山に行ってしまうのです。」

どうやらこの地で魔神の復活を画策しているのはインキュバスのようだった。

インキュバスは女の夢の中に入り込み、淫らな夢を見させて意のままに操ってしまう悪魔だった。

「主よ、急ぎましょう。」

ユダが立ち上がった。

それを笑顔で制しながら、イエスは再び老夫婦に尋ねた。

「そのクシナダは末娘と言われたが、ひとりごであったのですか？」

「いえ、双子でございました。」

イエスは立ち上がり、ユダを促した。

「まずいぞ、クシナダヒメは最後の鍵だったのだ。」

「はい。」

イエスは走り出しながら老夫婦に指示を出した。

「これからこのあたりは戦場になる。一族を連れて一旦この地を離れよ。」

「ユダよ。思った以上に厳しい戦いとなるぞ。覚悟はよいか？」

走りながらイエスはユダに尋ねた。

「もとより覚悟の上であります。」

ユダは笑顔で答えた後に表情を再び引き締めなおした。

「よし、行こう！」

イエスとユダは邪悪な思念を感じる場所を目指して森の中を駆け抜けていった。

「さあ、最後の宴だ！」

魔族の軍団を1000人ほど目の前にしながら、少し高台に立つインキュバスが氣勢を上げた。

「おお！！」

その声に促され氣勢を上げる魔族たち。

インキュバスの背後にはアシナヅチの8人の娘のうち、6人が横たわっていた。

みな虚ろな目をしていた。魂を抜かれたようであった。

その前に二人の娘が佇んでいる。

ひとりは黒いオーラに包まれている。

そしてもうひとり、クシナダはゆらゆらと揺れながら佇んでいた。

ひとりはクシナダの双子の姉、アシナダであった。

黒いオーラの中に強大なパワーが漲っている。

どうやら魔神が発現しているようだ。

「さあ、始めようか。」

インキュバスはクシナダを抱き寄せてその場に押し倒した。

クシナダは抵抗を見せない。心を支配されているようだ。

「どうもこういうのは燃えないんだよな。」

つぶやくとインキュバスは術を解いた。

ハッと自分を取り戻したクシナダは、目の前に迫る異形の者に驚いた。

「誰？」

「ふん。」

鼻息を荒くしたインキュバスはクシナダの衣服を引きちぎった。

「いやー！！」

抵抗しようとするが、なにやら術がかかっているようで体が動かな

い。

「へっへっへ。ほら股を開け。」

「いやっ！」

しかし、自然とクシナダの足が広がっていき、インキュバスの目の前でクシナダのまだ男を知らない綺麗な陰裂が露わになった。

そこにインキュバスの陰茎があてがわれた。

「だめっっ！！！」

恐怖の表情を浮かべるクシナダの反応を楽しみながら、地の底から響くような声でインキュバスは言った。

「さあ、滅びの始まりだ！」

その瞬間、クシナダの秘所は醜い陰茎で貫かれた。

「！！！」

声にならない悲鳴を上げ、クシナダの体は硬直した。

クシナダの秘所からは処女の鮮血がほとばしった。

クシナダの心の奥底から白い奔流が吹き上がり、自分の心が失われていく。

その刹那、アシナダの体から黒い光が、クシナダの体から白い光が立ち上り、螺旋を描くようにひとつになっっていく。

その頂点で黒と白の光は球体になり、あたりを飲み込んでいく。

仕事を終え、クシナダの体から離れたインキュバスは少し離れた位置でそれを見守った。

球体は8人の娘を飲み込んでゆく。

「さあ、大魔王の子の復活だ！」

大地が揺れた。

思わず足を取られたイエスとユダは、眼前を仰ぎ見た。

黒と白に輝く球体が周りの木々や空間を飲み込んでいく。

「始まってしまったか……。」

そのとき、大地の鳴動が収まった。

静寂の中に、不思議な鼓動とうめき声が広がる。  
球体から発せられているようだった。

すると、徐々にその球体が縮まっっていく。

イエスとユダはその場所を目指して再び走り出した。  
ふと視界が開けた。

球体はさらに縮まっっていく。

「今ならまだ間に合う！」

「おっと待った！」

イエスが再び一歩踏みだそうとした時、目の前にインキュバスが立ちはだかった。

「うっ！」

イエスたちの周りを魔族の軍団が取り囲んだ。

「神の子よ！待ちわびましたよ！」

言葉は丁寧だが、態度は慇懃無礼であった。

「夢魔インキュバスよ。直ちに事を納め、この場から立ち去れ。」

「へっ。またまたご冗談を。我らはサタンの命により世界を滅ぼすのだ。邪魔をしないでいただきたい。」

イエスは唇を噛んだ。

地の底に幽閉されながら、まだ神への反逆をあきらめないサタン。

神への信仰が未だ浸透せず、自らの教えがまだ道半ばの中、神々の力はサタンを滅する力をまだ持ち合わせていない。

「どうあっても？」

「どうあっても。」

ヘラヘラとにやけながら、インキュバスは即答した。

「いたしかたあるまい。」

ユダが差し出す剣を抜きながら、イエスは覚悟を決めた。

ユダも続いて剣を抜いた。

「お手向かいいたしますぞ！」

インキュバスはおどけながら言った。

そして軍勢に向かって号令した。

「さあ、神の子を血祭りに上げる！！」

魔族の軍勢は一斉にイエスに襲いかかった。

イエスは剣を左手で構え、右手で印を結ぶ。

その瞬間、イエスとユダの周りに光る魔法陣が浮かび上がる。

二人の剣が閃光に包まれた。

「ユダよ、心せよ！」

「はい！」

二手に分かれて軍勢に立ち向かっていく。

イエスは剣を横にはらう。

たちまち魔物10体ほどがまっつぶたつになり、消滅していく。

ユダも続いて剣を振る。

しかし、2対1000の戦いはそう簡単に終わりそうになかった。

インキュバスはいつの間にか球体のそばに戻り、下を見下ろしていた。

「倒すのは無理だろうがせいぜい時間をたくさん稼いでくれよ！」

そういうと、球体を見つめながら

「さあ、魔神よ目覚めるがいい！」

これから訪れるこの世の滅びを思うとワクワクしていた。

イエスを助けに向かうはずだった大天使ミカエルはそこを動けず  
いた。

地の国で魔族が蜂起したため、天使軍団を率いて地の国の入り口の  
防備に当たっていた。

にらみ合いが続いていた。

「陽動か。」

ミカエルは部下に問いかけた。

「そのようであります。おそらくは天使長を神の子の元に行かせな  
いためでしょう。」



「……。」

神の子イエスの力は絶大だ。しかし、自分が助勢に行かなければ苦戦は必至だった。

とにかくまずは自らの片腕、大天使ガブリエルを遣わせておくしかなかった。

ミカエルは苦悩した。

イエスたちの戦いは、ほぼ魔物を滅していた。

「もういいぞ！退け！」

インキュバスが号令すると、残っていた30体程の魔物は姿を消した。

「いい時間稼ぎだったろ？」

ニヤニヤしながらインキュバスはバカにしたような口調でイエスに言い放った。

「さあ、我が魔王の子の復活だ！」

イエスはそこを見た。

球体が形を変えていく。

段々と竜のような姿に変わっていく。

その光が消えていくと、姿は実体化していった。

背中には翼が生え、頭は8個あった。

魔神ネフィリムの復活だった。

「グウオオー！！」

不気味な咆哮と共に、ネフィリムは羽ばたいて飛び去っていく。

「どこへ行くのだ！」

イエスは見上げながら言った。

「魔神の目的はこの世界の滅びだ。おまえの相手をしている暇はない。」

インキュバスはそう言いながら姿を消した。

ネフィリムはそれぞれの口から炎のような黒い光を発した。

その先の大地が抉られていく。  
それは麓の村にも達していた。  
逃げまどう村人たち。

「主よ、どうしたら……。」  
ユダが戸惑っていた。

「神の子よ。」

イエスの傍らに光が現れた。  
徐々に人型を成していく。

「おお、大天使ガブリエル。」

その出で立ちには、長いベールを纏い、男とも女ともつかない顔立ちをしていた。

ユダはかしこまった。

「神の子よ、私も共に参りましょう。」

カブリエルにイエスは問いかけた。

「先ほどミカエルから私の元に囁きがあった。今、神の軍団は加勢に来れぬと。」

「ええ。今はサタンの軍勢と対峙しております。しかし、隙をみてミカエル様は加勢に来られると。今そのタイミングを計っております。」

イエスの問いにガブリエルは答えた。

すこし間が空いて、イエスはユダに指示をした。

「ユダよ。村の民を導きなさい。」

「私も主と共に……。」

「いや、おまえが導かねば民は惑うであらう。役目を果たしておくれ。」

ガブリエルもユダに語りかけた。

「導きの者ユダよ。神の子には我らが共にある。そなたの使命を果たせ。」

「やああって」

「はい。主命の通りに。」

ユダは立ち上がり、イエスの右手に口付けた。

「ご無事で！」

イエスが頷くと、ユダも頷き、きびすを返して麓へ走り出した。

咆哮のする方角へ目をやると、山の頂上でネフィリムがあたりを破壊し始めていた。

「神の子よ、参りましょう。」

ガブリエルは羽を羽ばたかせて飛んでいった。

イエスは目を閉じて念じた。

その体は白いオーラに包まれ、そのまま魔神のいる山頂めがけて飛び去って行った。

そのおぞましい姿は、その山の山頂にあった。

八つの口からは黒い炎を吐き、あたりを滅していった。

焼かれた場所は、混沌へと姿を変え、異次元に飲み込まれていく。まさに地獄絵図であった。

そこをめがけてふたつの光が飛んでいった。

「魔神よ。こちらだ。」

ネフィリムの目の前にイエスとカブリエルが立ちはだかった。

一瞬、ネフィリムは動きを止めた。

なにやら少し戸惑っているようだ。

イエスはネフィリムを観察した。

それぞれの頭の額の部分に8人の娘の顔が見えた。

「ガブリエルよ。あの8人の娘たちは、まだ自我が少し残っているようだ。」

「神の子よ。まずは彼女たちの自我を取り戻させましょう。」

頷いたイエスは、右手で印を結ぶ。

背後に魔法陣が浮かび上がり、イエスの右手に輝きが現れた。

まずは一番左の頭へ右手を振った。

その右手からは水が迸り、その頭の娘に直撃した。

聖水だった。

「ウォーッ！」

聖水を掛けられた頭はのたうち回り、力なくダラリと垂れ下がった。ハッと我に返ったネフィリムは残りの頭で攻撃を仕掛けてくる。

「神の子よ。私が魔神の注意を引きつけます。その隙に聖水を！」  
言うが早いか、ガブリエルはネフィリムへ向かって飛んでいった。  
イエスはその反対側へと動く。

二本の首がイエスめがけて炎を浴びせてくる。

残りをガブリエルが引きつけてくれているので、たやすく狙いを定めることが出来た。

次々とその頭に聖水を浴びせていく。

このまま行けば・・・。

イエスの脳裏に希望が湧いてきた。

ユダはアシナツチ達と合流し、村人達を遠くへと導いていた。

「賢者様。あれは何者ですか？」

遠く魔神を見つめながら老父は訪ねた。

「あんな八つの頭を持った生き物など見たことはありません。あれは魔物でございますか？」

まさかあれがあなたの娘達だとも言えず、ユダは答えに窮していた。「ともかくこの場を離れないと皆の命が危ない。あれは我が主に任せて早く！」

「あとふたつ！」

言うが早いか、イエスは目の前の頭に聖水を振りかけた。

残るは一つ。

ネフィリムの気を引いていたガブリエルがイエスの元に近づいた。

「神の子よ、あとひとつです。」

その瞬間、地底から黒い光の柱がネフィリムを巻き込んで立ち昇った。

大地が鳴動する。

地の底から低い声がした。

「我が子よ、力を与えよう。そして我が僕よ、目覚めるがいい！」

「サタンだ！」

ガブリエルが唸った。

サタンがその魔力を發揮したようだ。

「クッ！」

ネフィリムの垂れ下がった7つの頭が残った頭と融合していく。

「いかん、魔力が上がった！」

とたんにネフィリムを取り巻く光がハレーションを起こし爆発する。イエス達はその場から瞬間移動した。

「どうしたんだ！」

ユダと共にあった村人達の半分がうずくまり、うめき声を上げ始めた。

今の声は……。

サタンの声はユダにも聞こえていた。

「もしや……。」

剣を抜き、ユダは身構えた。

「賢者様、これは？」

「まともな者は私の後ろに回りなさい！」

戸惑いながら村人達がユダの背後に回る。

苦しんでいた村人達は、徐々にその姿を変えていく。

背中を突き破り、コウモリのような羽を生やし、耳は尖り、目は不気味な光を湛えてていく。

「サタンの遺伝子か！」

ユダは印を結ぶ。

剣は光を放ち始めた。

「さあ、後ろに走って逃げなさい！」

残りの村人達へ叫んだ。

今までの仲間が異形の者に姿を変えていくのを見て戸惑っていた村人達は、叫びながら逃げ出した。

「行かせん！」

ユダは追いかけてよとする魔物たちを右に左に動いて切って捨てる。そのユダをめがけて50体はいるであろう魔物達が襲いかかった。

まがまがしいオーラに身を包んだネフィリムがそこにいた。太刀を浴びせようと切り込んだガブリエルが、その黒いオーラに弾き飛ばされた。

「クツ、もの凄いパワーだ……。」

ネフィリムが頭をイエスに向けた。

その口から黒い炎が吐き出された。

「グワツ！」

とっさに光る剣で防いだが、体が弾き飛ばされ、地面に投げ出された。

イエスは立ち上がり、再び印を結んだ。

両手に魔法陣が浮かび上がる。

その手を目の前で交差させるとそこからまばゆい光線が発せられた。

その光はネフィリムの頭を吹き飛ばした。

しかし、その体の黒いオーラが頭の形になり、頭が再生していく。

「サタンがパワーを送り続けているのか……。」

左のわき腹が痛む。どうやらあばらを折ったようだ。

「さあ、どうする……。」

イエスは自問自答した。

「ミカエルよ！」

自分と呼ぶ声に、地の門と対峙していたミカエルは天上を仰ぎ見た。

「おお、我が神。」

その厳かな声が続ける。

「今、サタンの力は魔神に向いている。その隙にこの門を封印する。

そなたは我が子の元へ向かいなさい。」

「おお、我が神御自ら……。」

一礼し、飛び立とうとすると

「ミカエルよ、剣を遣わす。これを我が子に届けなさい。」

ミカエルの目の前に輝く大剣が現れた。

「はっ！」

うやうやしく拝礼すると、ミカエルはその剣を手に取り、そこから飛び立っていった。

そして、地の門はゆっくりと閉じられていった。

「さあ、どうしたのか……。」

イエスとガブリエルは何度も攻撃を繰り返したが、ことごとく滅した部分が再生し、さらに強大なパワーで反撃され、傷ついていた。追い打ちを掛けるようにサタンの声が響く。

「さあ、最後にしよう。」

ネフィリムのオーラが更に増大していく。

「マズい。このままではこの世界の半分が吹き飛ばされてしまう！」  
ガブリエルが呻いた。

「いや、差し違えてでも止めましょう。」

二人は最後を覚悟し、攻撃態勢を整えた。

「お待ちなさい。」

二人を光が包んだ。

「おお、天使長！」

ガブリエルは最敬礼をした。

「間に合って良かった。神の子よ、加勢をいたしますぞ。」

「おお、ミカエルよ。」

イエスは安堵した。

「神の子よ、あなたのお父上からお預かりして参った物がございませぬ。」

ミカエルが腕を払うと、そこから一本の大剣が現れた。

「これにて魔神を二つに割るより方法はありません。」

イエスはその剣を手に取った。

ミカエルは言った。

「我々も共に参ります。」



そう言うと、ミカエルとガブリエルは光となり、イエスの体と同化した。

剣を構えるイエスの体がこれまでにない光に包まれた。

イエスは再び印を切った。

その体はダビデの紋章で包まれた。更に険が光を増した。

「さあ、行きましょう。」

天使二人の声にイエスも前を見据えた。

さらに強大な黒いオーラを纏ったネフィリムが向かってきた。

イエスもネフィリムをめがけて切りかかる。

その刹那、激烈な光に包まれた。

静かになってどれくらい時間が経ったのだろう。

魔物の群を倒したユダは疲れ果てていた。

まさに満身創痍。

ネフィリムがいたあたりが光に包まれた瞬間に、残りの魔物はすべて消滅した。

まだこの世界があるということは、魔神は倒したのだろう。

いくつか傷は負ったが、アシナツチたちが治療をしてくれていた。

「ユダよ。」

その声に、ユダは振り向いた。

「おお、主よ。ご無事で。」

ユダは安堵した。

「おまえこそ、よくやってくれた。」

イエスはユダの怪我の場所に手をかざしながらねぎらった。するとその怪我はみるみる消えていった。

イエスはアシナツチに向かって言った。

「アシナツチよ。娘を帰す。」

イエスの背後には二人のよく似た少女が立っていた。

「おお、ありがとうございます。」

「お父様！」

駆け寄る三人は抱き合った。

「この二人しか助けられなかった。許しておくれ。」

イエスの表情は悲しげだった。

双子の上の6人の姉たちは、魔の力に長期間晒されたために、魂の救済と肉体の復活は不可能だった。

何とか助けられたクシナダとアシナダは、イエスが自らの血を飲ませ、天使の魂の一部を与えられて、元の姿に戻ることが出来たのだった。

「いえ、すべてあきらめておりましたものを、この子たちが助かっただけでも幸せでございます。」

「主よ。魔神はどうなったのでございますか？」

ユダは尋ねた。

「うむ。ネフィリムはこの剣によって二つに引き裂かれた。」

イエスは大剣を掲げた。

「そして、ミカエルがああ娘たちに封印した。」

「もう復活は無いのでしょうか？」

イエスは首を横に振った。

「いや、あの娘たちは別々に住ませなければなるまい。」

「我々はこの後どうしたら良いのでしょうか？」

イエスは決心したように言葉を続けた。

「私はこの地に残り、クシナダヒメと結ばれよう。クシナダにはネフィリムの神の魂が封印されている。さらに私の血によって封印を強固なものにしようと思う。」

「。。。。」

「そして、もしまた復活が画策されようとも、その魂を内在する者

を私と善のネフィリムで導こうと思う。」

「……。」

イエスはユダに向き直り、問いかけた。

「ユダよ。これからも私と共にあり、私を支えてくれないだろうか？」

ユダは即答した。

「主の御心のままに。」

ふたりは微笑み合った。

この戦いはその後、「ヤマタノオロチ」の伝説として語り継がれ、ネフィリムを倒した大剣は「草薙ぎの剣」として神器となった。

ネフィリムとイエスが戦った山は、山頂が削られ、平らな山となった。

そこは「ヤマ・タイラ」がなまって「ヤマタイ」と呼ばれた。

後にイエスとクシナダの子孫たちはその地に国を作り預言者「卑弥呼」によって統治された。

その国の名を「邪馬台国」という。

今、その場所は「八幡平」と呼ばれている。

「もうこんな時間か。」

老人が時計を仰ぎみると、針は12時を回っていた。

「とにかく、おまえさんには魔神の血と、神の子の血が流れておる。今までの魔神復活の経緯とはちよいと事情がちがうんじゃない。」

「。。。」

今まで歴史の教科書や聖書でしか読んだことの無かった存在が、自分の血脈であることを、飛鳥はそう簡単に理解できなかった。

「善の魔神の血とはいえ、魔神は魔神じゃ。それがおまえさんのように純真な娘に育ったのも神の子の血のなせる技じゃろつて。」  
老人は伸びをしながら言った。

「じゃから、おまえさんには魔神の力をコントロールする能力があるはずなんじゃ。魔神の力を発現させずにそのパワーを使い、自らを滅ぼそうとする者達と戦う術がある。それをマスターするための訓練が必要じゃ。」

老人の目に力が籠もったのを感じた。

「はい。」

飛鳥の返事を聞いた老人はふと微笑み

「さあ、まずは腹ごしらえじゃな。昼飯としよう。」

昼食を採り終え、本殿に戻った飛鳥に老人は地図を示した。

「これを見てごらん。」

地図には戸来神社を中心にして五芒星が描かれていた。

「この本殿の裏山には主イエスの墓所がある。そこを中心にしてこの星の頂点にはそれぞれ主自らの血によって儀式を施された、結界の要所を成す岩が配置されておる。この力によってここは聖域となり、魔の者は侵入出来なくなっておる。」

「確かに、ここに入ったとき清々しさと懐かしさを感じました。」

「うむ、おまえさんには主の血脈が流れておるからな。」  
あらためてイエスの力の大きさに感動する。

「さあ、おまえさんのご先祖様にお参りしよう。」

「はい。」

老人の先導で、飛鳥は裏山に登った。

100段ほどの石段を登りきると、目の前には森が切り開かれ、その真ん中にこんもりとした築山が現れた。

真ん中に細長い石柱が建てられていた。

その上部には五芒星が刻まれていた。

「ここが主イエスの墓所じゃ。」

「ここが……。」

その山を見つめると、飛鳥の心の中がどんどん温かくなっていくのを感じていた。

飛鳥はその場にひざまづき、手を組んで祈った。

老人は微笑んでいた。

「おまえさんは安倍晴明を知っておるか？」

「はい。本で読みましたし、映画も見ました。修学旅行の時は晴明神社にも行きました。」

「彼もイエスの血脈じゃ。」

「そういえば、神社にも映画にもこと同じ紋章がありました。」

「彼の超人的な能力も主の力があってこそ。同じ血脈のおまえさんにも出来ない訳はない。」

「そうなんですか……。」

不安そうな飛鳥に老人は

「じゃから自信を持ってということじゃ。」

なんとか励まそうとする老人の心を感じた飛鳥は、なんとか答えたいと思った。

「はい、頑張ります。」  
飛鳥は笑顔で答えた。

本殿に戻ると、老人は飛鳥に白装束を着させて御神体の正面に座らせた。

「まずは瞑想じゃ。あぐらを組んでみなさい。」  
飛鳥は戸惑った。

「おじいさん。僕、あぐらうって組んだことありません……。」「  
……そこからか……。」「

老人は苦笑いをしながら、ため息をついた。

飛鳥の正面に座り

「わしと同じようにしてみなさい。」  
「はい。」

飛鳥も見よう見まねで瞑想の型を取ってみた。

その日から、飛鳥の修行は始まった。

早朝、起床し身支度を整えるとまずは本殿で瞑想。

朝食を取り終えると、呪文や、術を発動するための印の結び方、魔法陣の書き方をたたき込まれる。

昼食後、神社内を掃除。

夕方は神社の裏手にある滝で水行。

社殿に戻り、入浴の後夕食を取り再び瞑想。

慣れない修行に飛鳥は必死に食らいついた。

特に水行は辛かった。

そんなに大きな滝ではなく、高所から水道水ほどの迸りが落ちてくるような滝ではあったが、なにせ12月末である。

水は肌を刺す凶器に変わる。

しかし飛鳥は歯を食いしばって耐えた。

三日も過ぎた頃、日付は12月31日となった。世の中は大晦日であった。

ご多分に漏れず、戸来神社にも初詣客が訪れた。

「飛鳥よ。このお札を売場に持っていておくれ。」

老人はいつしか飛鳥を名前で呼ぶようになっていた。

「はい。これですか？」

巫女の格好をした飛鳥が老人に近づくと、何やら祭壇の裏から取り出した。

「そうじゃ。これのおかげでうちも商売繁盛じゃからな！」

老人は無理矢理ウインクすると、お札の入った箱を飛鳥に渡した。

飛鳥は町の娘達とともに手伝いをしていた。

「これもお願いします！」

「飛鳥さん！家内安全が無くなりそう！」

「はい！もらってきます！」

また老人の元へ駆け出した。

飛鳥が売り場に入ってしまったと、一際美しさが際だってしまった、注目されることを嫌った老人の機転で売場には入らせなかった。

久しぶりに同年代の女の子と話し、少し心が晴れていった。

しかし、参拜にくる家族連れの姿を見かけると、過去の自分の家族と重ね合わせてしまい、挫けそうになる。

だが手伝いの忙しさがそのことを一瞬でも忘れさせてくれた。

老人の思いやりでもあった。

そんな忙しさも夜明け前に一段落し、休憩で女の子達としゃべる飛鳥を見て、老人はその運命を呪わざるを得なかった。

普通の女の子に生まれていれば、これが当たり前の姿だったのだ。

年が明けた。

飛鳥の修行は正月も関係なく続いた。

正月の参拜も一段落した頃。

戸来神社の石段の下の鳥居に一人の大柄な男が立っていた。鳥居に手を伸ばす。

その瞬間、男の手は弾かれた。

「やはりこの中には入れんか。」

石段の上を見やりながら呟く男の目には黒い光が宿っていた。

その背後に一人の男が駆け寄る。

「アドバン様。いかがですか？」

男は振り向いて

「うむ、例の作戦を実行するしかあるまい。」

「はっ。」

男は再び石段を見やった。

そして不敵な笑みを湛えたこの男、それは魔族軍千部隊を束ねるアドバンであった。



「やれやれ……。」

本殿前で印の組み方を修行している飛鳥を見つめながら、老人はため息をついた。

修行を始めてから3週間。

未だに飛鳥の術は発動しなかった。

「この子は本当に主の血脈なのか？」

覚えが悪いわけではない。

呪文も、印の組み方も魔法陣もすべて覚えた。

元々学校の成績の良かった飛鳥は飲み込みも早かった。

瞑想も上達している。

しかしなぜか力が発動しない。

（何か力の発動を阻害する原因があるのだろうか？）

飛鳥に宿るネフィリムの力は善き力である。

しかも滅せられることを望んでいないことは飛鳥の話により明らかであった。

ネフィリムの力をも押さえ込む要因……。

「む……。」

老人の頭にある仮説が閃いた。

確信は持てないが、理論上あり得る仮説だった。

「そうになると、コントロールは至難の業じゃな……。」  
「どうしたんですか？」

ぶつぶつと独り言を呟く老人を、いつの間にか目の前に来ていた飛鳥がのぞき込む。

「ゴホッ！」

愛くるしい笑顔でのぞき込まれ、老人はむせて咳込んでしまった。

「いや、何でもない。続けなさい。」  
「はい。」

飛鳥は元の位置に戻り修行を再開する。  
発動しないことに小首を傾げながら、印を結び続ける。  
その姿は可愛らしいのだが、そうも言ってられない。

「何とかせにやならんな。」  
再び呟く老人の目の端には、境内の端の樹の陰から様子を伺う勇一の姿を捉えていた。

勇一も老人に存在を気付かれているのは承知していた。  
アニユス・デイの目的はあくまでも飛鳥の抹殺であった。  
神の大儀の元に目的を果たす教団の存在意義は理解していた。

しかし、飛鳥の命を絶つ事が果たして本当に神の思し召しなのか？  
5年もの間老人の元で修行をした勇一は、思想的にも老人の影響を受けていた。

教団の人間なら、幹部の命令は絶対であったが、勇一はこの数日、  
自問自答を繰り返していた。

教団から精鋭部隊がこの戸来に送り込まれていた。  
今は攻撃のタイミングを見計らっていた。

思いを巡らせていた勇一はふと、老人が横に来ていた事に気付き狼狽した。

「慌てんでもよい。お主と話しに来ただけじゃ。」

本殿前を見ると飛鳥の姿は無かった。

「あの子は瞑想しに主の墓所に行った。」

「そうですね・・・。」

改めて老人に対峙した。

修業時代に比べ年老いたとはいえ、全く隙がない。

「まだあの子を狙うか？」

鋭い眼光を放ちながら、老人は尋ねた。

勇一は答えられなかった。

自分は何故彼女を狙うのか。

教団の命令？世界平和の為？

そのために何故、少女の命を奪わなければならないのか。

「悩んでおるのか。」

「・・・わからなくなってきました。」

ふと老人に自分に対する圧力が無くなったのを勇一は感じた。

「世界の平和と秩序のために、昔から神は人間の命を奪うことに躊躇いは無かった。」

老人は呟いた。

そう、ノアの箱船、ソドムとゴモラ、モーセの奇跡やダビデの息子など、世界の秩序を乱す者には神は容赦しなかった。

「じゃが、今回のことは元々神と魔の戦い。原因を作ったのは神と魔ではないのか？」

「・・・。」

確かにそうだ。

サタンを地に落としたのも、リスを地に落としたのも神だ。

そして生まれたネフィリムを分割し、人間に封印したのも神に仕える者だ。

そしてネフィリムを生んだのは魔の者だ。

「なぜ神や魔は人間を巻き込んだのだ？」

老人は勇一に問うた。

「人間は魔を封印するために作られた依り代とでもいうのか？そして何故、神に仕える者は自ら十戒を破る？」

十戒の第六戒は（殺してはならない）だ。

混乱する勇一に老人は

「悩むがよい。じゃが、お主が目的を果たそうとするならわしは全力で阻止する。」

そう言つて本殿へ歩き始めた。

その後ろ姿に一礼をして、勇一は去っていった。

遠くなる勇一の気配を感じながら老人は呟いた。

「わしの知っている神の子の教えとは相反する……。」

そこは戸来神社から5キロほど離れた林の中だった。

ブルドーザーなどの重機類のエンジン音が響いていた。

「監督！これをどかすんですか？」

シヨベルカーの運転手が尋ねる。

「ああ。この道路を拡張するのに邪魔だそうだ。」

「でもいいんですかね。昔からある守り岩だそうですけど。」

「ホンの数メートル動かすだけだ。大丈夫！」

「……了解」

運転手は気が乗らなそうだったが、岩の周りの盛り土にシヨベルを入れた。

やがて岩にはワイヤーが掛けられ、5メートルほど動かされた。

「ここでいいですか？監督！」

「ああ。ちよっと一服しよう。」

運転手が降りてきて監督の差し出すタバコから一本もらい、吸い始めた。

「じくろつさん！」

そう言つて監督は運転手の肩に手を掛けた。

その瞬間、運転手の体は破裂した。

監督の体から黒いオーラが立ち昇り、姿を変えていく。

その姿はアバドンであった。

「結界は消えた。さあ、行こうか。」

アバドンの背後の木々の間から数十体の魔族が現れた。

「む？結界が消えた？」

異常に気付いた老人は、飛鳥の荷物を持ってイエスの墓に向かった。今の状態で飛鳥を戦いに巻き込む訳には行かない。

老人とは思えない早さで石段を掛け昇ると、墓の前で瞑想する飛鳥

が見えた。

「飛鳥！」

気付いた飛鳥はキョトンとしていた。

それだけ老人の表情は鬼気迫っていたのだ。

「飛鳥！ いますぐここから逃げるんじゃ！」

「どうしたんですか？」

いまいち状況が飲み込めない飛鳥はまだゆっくりしていた。

飛鳥の元に着いた老人は飛鳥に荷物を持たせた。

「結界が破られた。魔の者が攻めてくるぞ。今のおまえさんでは太

刀打ちできません！ 早くここから逃げるんじゃ！」

「え……。」

突然の事に動揺する飛鳥。

戸来に来て三週間、結界に守られて平和に過ごしてきた飛鳥は、自分の運命を少し忘れていた。

その時、老人の肩越しに本殿を見た飛鳥は叫んだ！

「おじいさん！ 本殿が燃えてる！」

飛鳥と老人は本殿に向かつて走っていた。

本殿前の参道に差し掛かると、本殿を仰ぎ見る。

もうすでに本殿の周りは火の手が上がっている。

「おばあさんが……。」

本殿に向かおうとする飛鳥を老人は制止する。

「おまえさんは早くここから逃げるんじゃ！」

叫んだ瞬間、老人はもう手遅れであることを悟った。

周りを魔族に囲まれていたのだ。

「飛鳥！術を使うんじゃ！」

「はい！」

飛鳥は光の剣の印を結び、呪文を唱えた。

しかし、発動しない。

「なんで……。」

オロオロする飛鳥に魔族が襲いかかる。

「ターツー！！！」

老人が光の剣で魔族を切り捨てた。

「やはりダメか……。」

飛鳥を背後に匿い、老人は襲いかかる魔族を次々と切り捨てていった。

焼ける本殿の上で様子を見守っていたアバドンは、周りの樹の陰に隠れて攻撃の隙を伺うアニユス・デイの部隊を見やっていた。

「姑息な人間共め。」

鼻で笑いながら戦況を見つめていた。

「そろそろか。」

アバドンは部下に命令を下す。

「おい、ババアを連れて来い。」

老人の力は強大だった。

その力は魔族を圧倒した。

「おい、爺さん！」

アバドンが叫んだ。

声の方を見ると、魔族に抱えられた妻の姿が見えた。

「おばあさん！」

飛鳥が叫んだ。

「手出すな。このばあさん死ぬぞ？」

「なにをする気じゃ？」

構えながら返す。

「その娘をこちらに寄越せ。そしたら放してやる。」

「それは出来ない相談じゃ！」

「そうか？」

アバドンは鋭く伸びた爪を老婆の首に少し刺した。

傷口から血が滴るが、老婆は気丈に耐えていた。

「やめて！」

飛鳥は強い口調で叫んだ。

老人は驚いた。こんなに強い飛鳥は初めて見た。

「おじいさん。僕行きます。」

「しかし……。」

「いいんです。僕は大丈夫！」

飛鳥はニツコリ微笑んだ。しかしその声は震えていた。

老人は覚悟を決めた。

「わかった。」

「おじいさん、ありがとうございました。」

老人に一礼すると、アバドンに向き直り強い口調で叫んだ。

「今からそっちに行きます。だからおばあさんを放して！」

「いいだろう。同時に歩け。」

魔族は老婆を放した。

飛鳥と老婆は同時に歩きだした。

その時、老人はテレポートの印を組んでいた。

二人が重なったところで二人を瞬間移動させるつもりだった。

だんだん二人の距離が近づく。

最後の印を組み、発動させる瞬間だった。

「ウォーッ！」

あと1メートル程に近付いた時、木立の陰から数人の男が飛鳥に切りかかった。

アニユス・デイの部隊だった。

「しまった！」

老人とアバドンが同時に叫んだ。

数本の刀が飛鳥に迫る。

不意に強い力で押された。

倒れた飛鳥は押された方を見やった。

重なる刀の刃は老婆の体に突き刺さっていた。

飛鳥が刺される直前、老婆は渾身の力を振り絞り、飛鳥を突き飛ばしたのだった。

「おお・・・。」

老人の膝から力が抜け落ちた。

老婆を刺した男たちは魔族によって串刺しになっていた。

体に刀を刺したまま、老婆はその場に座り込み、飛鳥に語り掛けた。

「飛鳥ちゃん・・・あなたは・・・まだ死んじゃダメよ・・・。」

老婆の命が果てた。

飛鳥の心が弾けた。

髪の毛は逆立ち、その瞳に赤い光が宿る。

その目からは血の色をした涙がこぼれている。

その飛鳥に迫る魔族。



飛鳥は印を結び呪文を唱えると、その手には光の剣が現れた。その剣を横に凧ぎ払う。

「ギーーツ！」

襲いかかっていた魔族は真つ二つに切られ、消滅した。

老人は妻の元に駆け寄って抱き上げた。

どこからか勇一も駆け寄った。

「老師……。」

自分の仲間がしでかした所行に勇一は混乱していた。

そんな二人を飛鳥が、襲い来る魔族から守っていた。

それを見つめながら老人は勇一に呟いた。

「自分の命の危機より、他人の危機でしか力が発動しない。この子の優しさなんだろうが、危うい力だ……。」

勇一よ。これが許されるのか？おまえはどうするべきか考えろ！」

勇一は小さく頷き、飛鳥の横に立った。

「助勢する。」

勇一は剣を抜いて魔族に向かった。

後ろから二人の姿を見ていた老人は頷き、老婆を横たえた。

改めてテレポートの印を結んだ。

飛鳥だけはここから逃げさせないと……。

発動させようとした瞬間、老人の体に刀が突き刺さった。

そしてアニヌス・デイの数人が老人に切りかかる。

「やめるーっ！」

気付いた雄一が老人の元に駆けつける。

その声に飛鳥が老人に振り返った。

「今だ！」

アバドンの号令で魔族が飛鳥に襲いかかる。

勇一の剣は間に合わなかった。

数本の剣が老人の体を貫いていくのが飛鳥の瞳に映った。

飛鳥の魂が弾け飛んだ。

飛鳥の体が白い光に包まれた。

そこに襲いかかる魔族の体が、光に触れた瞬間消滅していく。やがて光の中から神々しく輝く飛鳥の姿が現れた。

勇一は呆気にとられて見つめるしかなかった。

ネフィリムの発動だった。

飛鳥は両手を広げた。

その指先から無数の光が発し、魔族とアニユス・デイの男たちへと向かった。

その光に触れた魔族は消滅し、男たちは撃ち抜かれて息絶えた。

「おのれ……。」

アバドンは飛鳥に切りかかる。

「我に仇為す者は消え去るのみ。」

飛鳥の声とは思えない鋭かな声が聞こえた。

飛鳥がアバドンに右の掌を向けた。

そこから白い光が発せられた。

「ギャーッ！」

アバドンが消滅していく。

その圧倒的な力を勇一はただ見つめるしか出来なかった。

まだ燃え盛る本殿の前、数十体のアニユス・デイの男たちの死体が散乱していた。

いつの間にか元に戻っていた飛鳥は、老人と勇一の元に駆けつけると、老人の手を取った。

「おじいさん……。」

老人の手にほんの少し力がこもった。

「おじいさん！」

「老師！」

老人は力無く目を開けた。

「飛鳥よ。生きるんじゃぞ……。」

老人は最期の力を振り絞って、飛鳥の手に勇一の手を重ねる。

「勇一よ、正しき道を歩め……。」  
その手の力が失われた。

「おじいさん!!!」  
何度呼んでも老人は答えない。

飛鳥は泣きながら、老人の体に突き刺さった剣を抜いた。  
抜きながら、勇一に向かって叫んだ。

「どうして？神様はこんなことを許すの？」  
その姿を見つめながら、勇一は答えを返すことが出来なかった。

飛鳥と勇一は、老人と妻を横に寝かせた。

飛鳥は老人から習った術の中から昇華の術を使った。

なぜかこの術だけはいつもの飛鳥でも発動した。

それを見ていた勇一は老人の言葉を思い出した。

(この子の優しさなんだろうが……。)

老人と妻の体が光りだし、その光は一つの玉になった。

その玉はやがて本殿の裏の石段を昇り、イエスの墓の土盛りには吸い込まれていった。

それを見届け、飛鳥はその場へたり込んだ。

燃え盛る本殿を見上げながら、勇一は自分に問いかけた。

「これは正しきことではない……。」

辺りに夕暮れがせまる頃。

焼け落ちた本殿跡。

消防と警察が現場検証をしている。

周りに散乱する数十体の死体。

その場に落ちていた剣から出た指紋の持ち主が鑑識から警視庁に知らされたのはその日の夜だった。

神名家殺人事件特別捜査本部に一際大きな声が響いた。

「神名飛鳥を指名手配する！」

東京へ向かう深夜バスの中。  
飛鳥は眠りに落ちていた。  
それを傍らで勇一が見守っていた。

凄惨な現場を後にしようとしたとき、勇一は飛鳥に語り掛けた。

「君の力の発現を阻止する要素が、おそらく君の中にある。」  
振り返る飛鳥。

「ボクの中に？」

「それを確かめないと、君はいつまでも命の危機にさらされるだろう。」

「・・・」

「君に会わせたい人がいる。僕について来てくれ。」

「あなたはボクを殺そうとした。今もあなたの仲間におじいさん達は殺された。どうやってあなたを信じろっていうの？」

「・・・」

勇一は言葉に詰まった。

しかし今は教団の命令に従う意志は消えていた。

目的のために罪もない少女を殺害しようとする事に疑問を感じていた。

「・・・確かにそうだろう。だが、老師の恩に報いたい。老師の遺言でもあるんだ。」

知らずに頬を涙が伝った。

それを見た途端、飛鳥の心の中の疑念が洗われていった。

心の奥底から今は信じてみようという意志が大きくなっていった。

これは自分の中にあるネフィリムかイエスの血がささやいているよ

うに感じた。

「・・・どこに行くの？」

「東京。」

戸来神社を出た二人は青森に出てそのまま深夜バスに乗り込んだ。飛鳥が重要参考人として手配されていることを勇一は知っていた。駅や空港のターミナルはなるべく避けたかった。

疲れていた飛鳥はかすかに寝息を立てている。

その美しい寝顔に内心ドキツとした。

この可憐な少女の中に、世界を滅ぼし得る魔神がいるとは誰も想像できないだろう。

そして、初めて飛鳥を見たときに、自分の中に沸き上がった懐かしさと愛おしさに似た感情が何だったのか、いまだにわからなかった。その感情が飛鳥殺害を一瞬躊躇わせていた。

ただ美しい少女に出会ったから、という感情とはとても思えなかった。

現に今も、教団を裏切つてまで飛鳥に手を差し伸べようとしている自分がいる。

ずれ落ちたブランケットを掛けなおしてやりながら、勇一はこの後自分がどうするべきか、どうあるべきかを考えていた。

まずは飛鳥の中の謎を解く。

そのためにまずは東京のカトリック教会の跡見枢機卿に会わせるのが良策だと考えた。

現在の争いの構図の中にローマカトリック教会は関与していないはずだった。

あくまでもアニヌスデイは異端集団であり、バチカンには認められていない。

跡見枢機卿はバチカンでの法王の信頼も暑く、悪魔払いなどの法力の強さでも一目置かれている。

勇一は以前、跡見卿に付いてキリスト教を学んでいた。

そこで勇一の法力の強さを見いだした跡見卿が、戸来神社の今野老人の元へと修行に出したのだった。

勇一は優秀だった。

今野老人は自分の跡を継ぐのは勇一だと公言してはばからなかった。しかし、勇一は裏切った。

より過激で、より過酷な修練を目的とするアニユスデイへと傾倒し、出奔した。

勇一は、自分の中にたまに生じる”強さへの憧れ”に苦しみ、そしてその衝動が自分を今の道を進ませている元凶だと感じていた。なぜそのような衝動に駆られるのか。

たまに感じる自分の中の黒い衝動を押さえ込めるだけの力を身につけたい。

そう思つて教団へ合流した。

今となつてはそれが正しかったかどうかわからなくなっていた。

今の教団は、目的のためには手段を選ばない殺戮集団としか思えない。

しかし今はそこに思いを巡らせている余裕は無い。

何が飛鳥の力の発現を阻害しているのか。

それをまずは解き明かすこと。

もう今は跡見卿の法力に頼る以外なかった。

「少し休もう。」

勇一もブランケットを掛け直し、眠りに就いた。

バスは夜の高速を疾走した。

やがて夜が明けた。

カーテンの隙間から差し込む朝日を受けて飛鳥が目を覚ました。

途中の大宮駅で途中下車すると、喫茶店で朝食を採った。

駅前の24時間営業の量販店でフルフェイスのヘルメットと厚手の手袋を買い、駅の近くの駐輪場に停めておいた大型バイクへ向かった。

「ここからはバイクで行く。寒いぞ。」

そう言うと勇一は飛鳥にヘルメットと手袋をポンと投げた。

飛鳥はヘルメットを付けようとするが、やり方がわからない。あたふたする飛鳥の仕草に少し可笑しくなりクスツと笑った。

「なんですか？」

少し口を尖らせて飛鳥が抗議する。

「ゴメンゴメン。」

仕方なく勇一は顎の留め具を留めてやる。

飛鳥は自分の首筋に勇一の手が触れて少しドキッとした。

「さあ、乗って。」

飛鳥はバイクの後部座席に乗った。

まごまごしていると勇一が言う。

「僕の腰にしっかりと捕まって。」

「はい。」

おそるおそる勇一の腰に腕を回す。

ドキドキが高まるのを飛鳥は感じた。

勇一はキーを回しエンジンを掛ける。

大型バイク特有の太いエキゾーストノートを響かせる。

差し込む朝日の中、二人を乗せたバイクが走り出した。



二人を乗せたバイクは都内に入った。  
途中数力所で警察の検問が行われていた。  
そのたびに勇一は道を変え、都心へと向かっていた。  
目指すは日本のローマカトリックの総本山、東京カテドラルマリア  
大聖堂だった。

やがてバイクは大聖堂へとたどり着いた。

駐車場にバイクを止めると、聖堂から賛美歌が聞こえてくる。

今日は日曜日。

日曜礼拝が行われていた。

勇一は飛鳥を伴って大聖堂へ向かう。

木製の荘厳な大きなドアをくぐり中にはいると、信者が溢れていた。  
賛美歌が終わり、説教の音が響き始めた。

正面のパイプオルガンの真下に設えられた説教台には背の高い、一  
段と威厳のありそうな神父が信者に語り掛けていた。

勇一は信者席の最後列に腰を下ろした。

飛鳥も横に座る。

やがてミサが終わり、信者が一列に並びだした。

神父が一人一人に祝福を与えている。

勇一たちも列の最後尾に並んだ。

15分ほど並んでようやく自分達の番がきた。

先に勇一が祝福を受ける。

「神と子と精霊の名において。」

勇一が言うつと

「神の祝福があらんことを。」  
神父が受ける。

神父は勇一の額に手を置きながら言った。

「そろそろかなとは思っていた。私の部屋で待っていなさい。」

「はい。」

勇一は横に退き、飛鳥の番になる。

神父は飛鳥の目をみつめ、優しく微笑んだ。

「よく来たね。安心しておいで。」

そう言っつて飛鳥の額に手を置いた。

「はい。」

飛鳥は目を閉じた。

額にある手の暖かさに心が落ち着いていくのがわかる。

ふと手が離れるのを感じ目を開けると、今までの威厳はどこに行っ  
たのか、神父がウインクをしながらお茶目に言った。

「お嬢さん、では後ほど。」

勇一と一緒に神父の執務室に通される。

しばらく待っていると、先ほどの神父が入ってきた。

「お久しぶりです。」

勇一が深々と頭を下げる。

「ああ、よいよい。」

挨拶もそこそこに、神父は飛鳥のもとへ近づいてくる。

「初めまして、お嬢さん。私は跡見といいます。」

優しい笑顔に飛鳥はホツとした。

「はじめまして。神名飛鳥です。」

「うん、よいお嬢さんだな。」

カツカと高笑いをする。

「枢機卿。お願いが……。」

その言葉を遮って神父は話した。

「まあまあ、その前にお茶を飲みなさい。」

と、ふたりにお茶を勧めた。

二人がソファーに腰掛けると、やおら神父が話し始めた。  
「大体の事情は察しておる。まあ落ち着きなさい。」

その場で勇一はこれまでのいきさつを話した。

「そうか・・・今野さんがな・・・。」

すこし悲しげな表情を見せたが、改めて飛鳥に向き直り

「ではお嬢さん、君の心の中を少し覗かせてもらおうかね。」

そついうと、目に力を込めた。

途端に飛鳥の意識が飛んだ。

グツタリとソファーにもたれかかった飛鳥を勇一が抱えあげて、ソファーに横たえる。

神父は飛鳥の頭の横に座り、その額に左手のひらを当て、右手で印を組む。

気合いと共に、神父の意識は飛鳥の意識とシンクロした。

そこに見えてくるビジョン。

今までの飛鳥の記憶。

そして、その奥の赤い意識体に触れた瞬間、神父の意識が弾き飛ばされた。

「うつむ、さすがに魔神の意識。跳ね返しおったわ。」

気付かない内に額に浮かんでいた汗を拭いながら、神父が態勢を整えた。

「何かわかりましたか？」

勇一が尋ねる。

「うむ。この子には兄があったであろう？」

「はい。どうやらこの娘に殺されたようです。」

「・・・。」

神父は考え込んだ。

「卿？」

「勇一よ。この娘の記憶から紐解くには、この子の兄は魔の者に変

化していたようだが……。」

「……そのようです。」

「うむ……。」

神父は立ち上がり、目を瞑った。

「どうやらこの子の一族にサタンの遺伝子が紛れておったようじゃな。」

「え……それでは……。」

勇一は愕然とした。

そして、神父の口から話される事柄が予想できた。

「うむ。この子の力の発現を阻止しているのはサタンの力じゃ。」

「なぜ……。」

勇一は絶句した。

飛鳥には神の子の血がながれているはずだった。

なぜそのようなことが可能だったのか。

「今、神の力は魔の者と対峙していて疲弊している。その隙を突かれたとしか言いようがない。あるいは地の底に幽閉されてなお、燃え尽きる事のないサタンの執念じゃな。」

「……。」

「まるでおまえのようじゃな……。」

神父が呟いたが、勇一にはあまり聞き取れなかった。

「え?」

考え込む勇一に神父は声をかけた。

「まあ、そう考え込むな。この子の本当の力は神の子の血が守っておる。この子の意識が解放された時、サタンの目論見は崩れるじゃろうて。」

「では魔神の方は?」

神父は笑顔になって

「今この子の中にある魔神は純粹に生きようとしている。魔の部分は見えてこない。」

「そうですか……。」

しかし、神父は勇一に釘を刺した。

「しかしな、この子の意識が魔に染まれば、魔神は悪になる。そこには注意せんといかんぞ。」

「はい。」

「まあ、この子にはしばらくは内緒にしておくことじゃな。」

「はい。」

「今は極力身を隠す事じゃ。」

一息置いて神父が続けた。

「ときに勇一よ。」

神父は話を繋ぐ。

「おまえは異端に身を置いていたはずじゃが？」

「。。。。。」

聞かれるとは思っていた。

「いろいろありました。今は間違っていたと思っています。」

「そうか。。。。。」

そう言つて神父は窓から外を覗きながら

「また道がわからなくなったら、必ず私に会いに来なさい。」

「。。。。はい。」

神父の口振りに何か含みを感じたが、そう答えた。

飛鳥が目を覚ました。

神父が優しく声をかけた。

「大丈夫じゃ、お嬢さん。自分の生きたいという気持ちを強く持ち続けるんじゃないぞ？」

「はい。」

「そうすれば、自ずと進む道が見えてくる。」

神父はまた高笑いをした。

大聖堂を出て、再びバイクに乗ろうとしたが、飛鳥がふと立ち止ま

った。

「あの……。」

「どうした？」

「ホンの少しでいいんですけど、僕の家を見に行きたいんです。」

勇一は一瞬考えた。

「君は警察に手配されてるんだぞ？」

「……無理ならいいんです……。」

消え入りそうな声だ。

無理もない。

流れの中で何の覚悟もなく、自分の居場所から追い出されたのだ。

「……わかった。でも少しでも危なかったらすぐに立ち去るぞ。」

飛鳥の表情が明るく変わった。

「はい。ありがとうございます。」

二人を乗せたバイクは再び走り出した。

あと200メートルも行けば自分の家だった。

懐かしい風景が広がっているが、飛鳥はフルフェイスのヘルメットを被ったまま自宅の前を勇一のバイクの後ろに乗ってゆっくり近づいていく。

家の門にはドラマで見たことのある黄色いテープが張られていた。つい一ヶ月前に兄と二人で生活していた家だった。

「このまま止まらずに行くぞ。」

飛鳥は返事をしない代わりに勇一の腰に回した腕にギュツと力を込めた。

そのままバイクは走り抜けたが、しばらくして勇一はバイクを停めた。

飛鳥がふと見上げるとそこは飛鳥の通った高校だった。

勇一が気を利かせてくれたらしい。

しばらく校舎を見つめていた飛鳥が泣いているのを、勇一は感じていた。

「行くぞ。」

「はい。」

再び走り出すと、少し離れた公園にバイクを停めた。

そこは少し広い公園で真ん中は芝生の広場、その周りを木々が取り囲んでいた。

その木々の中のベンチとテーブルを見つけると、飛鳥を座らせた。いつの間にもどこで買ったのだろう、缶コーヒーを飛鳥に手渡す。

「ありがとう。」

缶コーヒーを握りしめ、その温かさを噛みしめる。

「ちよつとここで待っていてくれ。いろいろ準備しなければならない物があるから。」

「はい。」

勇一はバイクに向かった。

遠ざかる勇一の姿を見ながら、飛鳥はコーヒーに口をつける。この公園は学校帰りに同級生の由佳達とよく遊びに来た所だった。ふと楽しかったその頃を思い出すと涙が溢れそうになる。

グツと堪えてコーヒーを一気に飲み干した。

芝生の広場の方から子供のハシヤギ声が聞こえてくる。

前と変わらない穏やかな時間が、ここには流れていた。

昨日の悪夢の様な出来事が信じられないくらい穏やかだった。

「飛鳥？」

ふいに女性の声で名前を呼ばれた。

聞き覚えのある声だった。

「由佳？」

振り向くと学校帰りの由佳が遊歩道から覗き込んでいた。

「ほら、やっぱり飛鳥だ！ねえ、みんな！」

「飛鳥ー！」

由佳を先頭に真奈美や美樹も飛鳥の元へ走り出した。

「みんなー！」

一斉に飛鳥に抱きついた。

「飛鳥！どうしてたのよ。すっごい心配してたんだから！」

飛鳥は泣き出して声にならなかった。

由佳達は飛鳥が泣き終わるのをしばらく待った。

数分が過ぎ、ようやく飛鳥も落ち着きを取り戻した。

テーブルを挟んで4人は座った。

「飛鳥、大丈夫？」

隣に座った由佳が尋ねる。

「うん。僕もみんなに会いたかった。」

飛鳥が答える。

「急にいなくなっちゃうし、あんなことが起こるし。心配してたんだよー！」



「ごめんね……。」

「ねえ、飛鳥。」

「なに？」

由佳が言いにくそうに切り出した。

「飛鳥。飛鳥のお兄さんの件、飛鳥じゃないよね？」

飛鳥はどう答えていいかわからなかった。

状況からいって自分がやったとは思えないのではあるが、記憶も意志も無かった。

「覚えてないんだ。僕が気が付いたらお兄ちゃんがあんなことになつて……。」

飛鳥は震えながら答えた。

「そっか。」

由佳はそんな飛鳥をギュッと抱きしめる。

「なんにしろ、飛鳥が無事でよかったよ。」

真奈美が言う。

「ホント。刑事がいつぱい来て……。」

言いかけて他の二人に止められる美樹。

そんな空気を察して飛鳥が尋ねた。

「いま、どうなってるの？」

黙り込む三人。

踏ん切りを付けたのか、由佳が語り出す。

「飛鳥。しっかり聞いてね。飛鳥は今、お兄さんの件と青森の件で指名手配になってる。」

「……。」

勇一から重要参考人として手配されていることは聞いていた。

しかし、状況が変わってしまったようだ。

「でも……。」

美樹が口を開く。

「飛鳥にそんなこと出来るわけないじゃん。」

由佳と真奈美も顔をあげて同意する。

「こんなか弱いブラコン娘にそんなこと出来るわけない！」  
由佳が力説する。

他の二人が力強く頷く。

笑いが起こった。

ああ、親友ってありがたい。

飛鳥はそう思った。

三人ともその後、そのことは聞かなかった。

「なんだ？」

ふと、飛鳥を残してきた方向からおびただしい邪気が感じられた。

勇一は慌ててバイクに飛び乗った。

森の中のベンチで語らう飛鳥達。

気が付くと、辺りは暗くなっていた。

そこに迫る多くの黒い影に飛鳥は気付いていなかった。

「！」

飛鳥が異変を察知した。

周りを見渡すと50人くらいの男女が飛鳥達を取り囲んでいた。

「なに？」

由佳達もただならぬ気配を感じ怯えていた。

取り囲む全員はその顔からは表情が欠落していた。

「ウォーッ！」

数人が飛鳥達に襲いかかってきた。

「キャッ！」

うづくまる4人の前に黒い影が立ちはだかった。

「グワッ！」

襲ってきた数人が弾き飛ばされた。

恐る恐る飛鳥が見上げると、鉄パイプを振りかざした勇一が立っていた。

「勇一さん！」

「奴らだ。戦えるか？」

後ろを振り返ると由佳達は怯えていた。

周りを見渡すと取り囲んだ連中がジリジリと間を詰めてくる。

「グツ！」

目を瞑り、精神を集中する飛鳥。

しかしなにも起こらない。

「ダメか！」

言うのと同時に、勇一に数人が襲いかかってきた。

「飛鳥！何とか逃げるんだ！」

襲いかかってきた人たちをなぎ倒しながら、勇一は道を作ろうとする。

「由佳！真奈美！美樹！こっち！」

由佳の腕を掴んでその方向へ向かう。

勇一が道を開けた場所から突破を計ると、その目線の先に一人の少女が現れた。

満月を背にしたその少女は、逆光のうえにロングヘアに隠れて顔が見えないが、飛鳥と同じくらいの年齢に見受けられた。

「逃がさないよ！」

少女が右手を挙げて、降り下ろした。

その瞬間、地響きと共に聞き覚えのある低い、嫌な声が響いた。

「我が僕たちよ、目覚めよ！」

すると勇一に倒された人々を含め、取り囲んでいた全員が苦しみだした。

次々と変身していく人々。

耳は尖り、背中からはグロテスクな羽が生え、体が大きくなってい

く。

飛鳥の兄や、あかねを襲った男たちと同じだった。それを見ながら、勇一は呟いた。

「これがサタンの血脈……。」

一斉に勇一や飛鳥達に襲いかかってきた。

「多すぎる……。」

勇一は印を結び呪文を唱えると、光の剣が出現した。襲いかかる魔物に振り下ろす。

「ギャーツ！」

切られた魔物は消滅した。

力は勇一が圧倒しているが、いかんせん数が多い。飛鳥の方を見やった。

飛鳥を数体の魔物が木に押しつけていた。

「やめてー！」

魔物が数体ずつ、由佳達を組み倒していた。

「グへへ……。」

声にならない猥雑なうめき声を発しながら、魔物たちは由佳達の服をはぎ取った。

「イヤー！」

「マズい！」

勇一は助けに行こうとするが、次から次へと魔物が襲いかかってくる。

由佳達はそれぞれが組み敷かれ、乳房や秘所に舌をねぶられていた。そして魔物の一体が、由佳の股間に醜いペニスをあてがった。

「ダメ！」

躊躇無く、由佳の秘所にペニスがねじ込まれた。

「イヤーツ！」

「ドクン・・・！」

飛鳥は、血が沸騰するのを感じた。

一瞬のハレーション。

その光は飛鳥を中心に由佳達を包んだ。

「ギーッ！」

断末魔の叫びと共に、光に包まれた魔物が消滅した。

光はだんだん収束してきた。

その光の中心には、髪を逆立てた飛鳥が立っていた。

「飛鳥・・・。」

その迫力に圧倒される勇一。

よく見ると、頬が赤く染まっている。

飛鳥は血の涙を流していた。

それを見守っていた少女が再び右手を降り下ろした。

次々に襲いかかる魔物。

飛鳥は右手を一閃する。

すると、その延長線上に光が走り、魔物たちは真つ二つになった。

「すごい・・・。」

勇一は飛鳥のもとへ走った。

その間も魔物は次々と飛鳥に襲いかかった。

しかし、腕のひと降りですれらを一扫する。

ふと飛鳥の背後から襲いかかるうとする魔物を見つけた勇一は、その魔物に向かい切り捨てた。

飛鳥と背中合わせになる。

「・・・飛鳥か？」

「はい。私のみです。」

飛鳥のまま、ネフィリムが発動したようだ。

「フッフ、なかなかやるじゃないか。」

二人の前に森の奥から、あの少女が姿を現した。

「おまえは誰だ？」

「私かい？」

少女は、顔にかかる長い髪をかき上げた。

飛鳥と勇一は息を呑んだ。

髪の長さ以外、目の前の少女は飛鳥に瓜二つだった。

「どうということだ……。」

勇一は飛鳥を見た。

呆然とする飛鳥が呟く。

「姉さん……？」

ふと少女の姿に黒い霧がかかる。

「私は雪乃。友利雪乃。また会いにくるわ。」

そう言いながら、黒い霧が晴れていくと、少女の姿は消えていた。

呆気にとられたまま、少し時間が流れた。

ふと、由佳達のことを思い出した。

「由佳……。」

あたりを見回すと、3人ともはぎ取られた衣服を体にあてがい、身を寄せ合って震えていた。

飛鳥を見る目が怯えていた。

「大丈夫、由佳？」

近付こうとした飛鳥に向かって由佳は叫んだ。

「来ないで！バケモノ！！」

一瞬飛鳥は怯んだ。

勇一は掛ける言葉が無かった。

飛鳥は下を向いている。

顔の表情が髪の毛に隠れ見えなかったが、泣いているように見えた。飛鳥は右手を由佳達に向けた。

「おい、どうするんだ!」

飛鳥の掌から白い光が発せられ、由佳達に当たる。バタバタと倒れる三人。

「殺したのか?」

由佳達に近寄りながら、勇一が聞く。

「・・・いいえ。記憶を消しました。」

ホッと胸をなで下ろした勇一は、由佳達の服を拾い上げ飛鳥と共に三人に着せていく。

着せ終わると飛鳥は再度右手を振った。

由佳達の体は光に包まれ、消えた。

「学校の教室にレポートさせました・・・。」

そう言い終わると、飛鳥の体から光が消えた。

勇一は声を掛けるのを躊躇った。

親友に「バケモノ」と言われたのだ。

その心中は張り裂けそうであろう。

そんな勇一の思いに気付いたのか、飛鳥が顔を上げた。

「やっぱり僕はここに来ちゃいけないかったですね。」

顔は笑顔だが、その目からは涙が溢れている。

「さあ、行きましょう。」

満月に照らされた飛鳥の顔には涙が光っていた。

その男は数百人の聴衆の前に立っていた。

その男の前には車椅子に座る若い女性がいた。

体は包帯で巻かれ、その顔は半分が火傷の痕らしいケロイドが広がっている。

「教皇様。どうか私に救いをお与えください……。」

その女性は教皇と呼ぶ男に祈った。

教皇は何度か頷き、女性の顔を両手で包み込んだ。

その瞬間、その手からは光が放たれた。

10秒ほどして、光が消えた。

女性の顔から手が離されると、聴衆からはどよめきが起こった。

その女性の顔から火傷の痕が消えていたからであった。

「おお……教皇様……。」

女性は涙を流して車椅子から立ち上がり、ひざまづいた。

その頭に手を起きながら、教皇は聴衆に語りかけた。

「私に付く者は大いなる救いを与えられるでしょう。」

そのスポットライトを浴びる教皇は、まだ10歳そこそこの白人の男の子の姿であった。

秘密結社セイנט。

近年信者を飛躍的に延ばしてきた新興宗教団体である。

その教団本部の大会堂で、その秘技は行われていた。

「ハンス様。」

舞台裏へと戻ってきたその少年に、雪乃はひざまずいて声を掛けた。



「雪乃か。無事戻ったようだね。」

「はい。」

そのまま雪乃はハンスに付き従い、屋敷の奥へと向かう。その途中の広間では、信者の男女が乱交を愉しんでいる。

教団の入信者は幻覚薬を与えられ、異性をあてがわれていた。

もちろん、あてがわれる男女には悪魔の精と力が注がれており、交わったと同時に魔に汚されていく。

まさに阿鼻叫喚といった世界だ。

あちらこちらで男の荒い息遣いと、女の愉悦の叫びが聞こえてくる。

雪乃には少々耐えがたい光景であった。

「まだ慣れない？」

ハンスが尋ねた。

「いえ。。。。。」

ハンスは口元に笑みを称えながら先へ進む。

雪乃は付き従った。

やがて屋敷の一番奥の部屋に着くと、ハンスは玉座に腰掛けた。

雪乃はその前にひざまずく。

「報告いたします。神名飛鳥と接触いたしました。」

「どうだった？」

「なかなか力は強いと思われませんが、未だ自身のコントロール下には無いようです。」

「そっか。。。。。」

ハンスは思案顔になった。

「雪乃。君は君の妹の精神を破壊出来るのかい？」

「。。。。。」

雪乃は即答できなかった。

今日初めて会ったが、双子であるが故に自分とよく似ていた姿に戸

惑いは感じていた。

その様子を見て、ハンスは問いかけた。

「僕達の目的はわかっているよね？」

雪乃は顔を上げて答えた。

「はい。神と人を滅し、この世を混沌より無に至らしめ、その後浄化再生へと導くことです。」

ハンスは頷きながら

「うん。そのための先兵として、親衛隊長たる君がいる。そのことを忘れてはいけないよ。」

「ハッ。」

雪乃は頭を下げると、その場から退いた。

「こんなんでいいのかい？ベルゼバブ。」

ハンスの背後に陽炎が立ち、やがて実体化するとそこにはベルゼバブが立っていた。

「ああ。まあ最後の目標は少々違うがね。」

「フフフ・・・。」

ハンスがイタズラっぽく笑った。

「その日のためにあの小娘をさらって育てたのだからな。」

「ハハ、早いとこ魂を一つにしてやらなきゃね。」

「ああ。」

「そして早く人間どもの遺伝子の半分も覚醒させてやらないとね。」

その二人の目には怪しい輝きが湛えられていた。

人間はそもそも神と魔の子供である。

その身に湛えた遺伝子は二重螺旋を描いている。

現状で人間の遺伝には片方の塩基配列だけで充分である。

では何故、人間の遺伝子は二重螺旋を形成しているのか。それはもう一方が悪魔の遺伝子だからであった。

その魔の遺伝子が優勢な人間か、魔の力によって配列を変えられた人間は、魔の物の力によってトリガーが弾かれ魔物へと化身するのだった。

その目的を布教という形にカムフラージュして推進しているのがセインツである。

闇の者たちの勢力は着々と数を増しているのであった。

「我らの真の目的へ、悲願の達成まであと少しだ。」  
ハンスが静かに言った。

「ああ。」

ベルゼバブは怪しい笑みを浮かべた。

「光あれ！」

その言葉によつて世界は始まった。

絶対的な無の世界からこの世界を作り出した唯一無二の全能なる善なる神。

その神は太古、善と悪を兼ね備えた存在であつた。

世界を光と闇に分けた後、神は己の中の悪を分離し、闇の世界に悪である分身を置いた。

それはアゼザルとして闇の世界を統べた。

悪ではあつたが、アゼザルには野心というものが無かつたので、何事もなく神とアゼザルは住み分けられていた。

次に神は、自分の姿に似せて自分の僕となる天使を作られた。

その数は無限に近く、そしてその天使に階級を付けられた。

すなわち、第一階級に幟天使セラフィム・智天使ケルビム・座天使スローンズ。

第二階級に主天使ドミニオンズ・力天使ヴァーチューズ・能天使パウーズ。

第三階級に権天使プリンシパリティーズ・大天使アークエンジェルズ・天使エンジェルズ。

今の天使長ミカエルは「大天使」の位置にある。

神が世界の創世を終わらせた後、天界には最初の天使の長に熾天使ルシファーがいた。

その姿は荘厳華麗にして見目麗しく、六枚の美しい羽を持ち、その姿は厳かな光に包まれていた。

ルシファーは神をして「明けの明星、曙の子よ」と讃えられるほどの聡明さを持っていた。

それほどの力を湛えていたルシファーは、そのうち神に取って代わりこの世界を支配することを企んだ。

やがてその企みはギリギリのところまで露見し、怒った神はルシファーを天界から追放した。

墮天したルシファーは、闇の世界のアザゼルと融合した。

純粹悪のアザゼルとルシファーの野心が融合した結果、その身はサタンと化しバビロニア王ネブカドネザル二世として地上世界に出現した。

そこにはルシファーに付き従った墮天使達が配下として仕えていた。その身を蛇に変え、アダムとイブに知恵の木の実を食べさせたサマエルや蠅の王ベルゼバブ、戦いの鬼神でイナゴの王アバドンや悪魔憑きで有名なアスモデウスが直神として仕えていた。

こうして世界は善と悪、光の道と闇の道に分かれることになった。

神が善と悪に分かれたときから、それはこの世界の宿命となった。

天使と人間は必ずどちらかの道に進まなければならず、光と闇・善と悪はこの世の終わりまで絶えず戦い続ける運命となった。

やがて墮天使達は人間の妻を娶り、その子として巨人族であるデー

モンが生まれた。

また墮天使達は人間に武器の作り方や冶金術・化粧や魔法を教えた。そのことによつて人間は、女は媚びを売ることを覚え、男は戦うことを覚えた。

それに怒つた神はサタンと戦い、討ち果たした後サタンを地下に幽閉した。

そして人間には罰として大洪水を巻き起こした。

当時人間の寿命は数百年であつたが、その罰以来人間の寿命は飛躍的に短くなつた。

光の道に生きる物の目的は、人間の体⇨悪魔の檻から魂⇨神の力を解放することに転化し、肉体から魂を引き剥がす⇨解放へと変節した。

すなわち悪の一掃、善のみの世界の構築である。

そして闇に生きる者、すなわち魔族の目的は

善と悪の融合による混沌を生み出し、やがて圧倒的な無の世界へ転化する「滅び」へと終着した。

光と闇は、この世が週末を迎えるまで未来永劫戦い続ける宿命を負つてしまつたのだつた。

光は闇を一掃する。

暗闇で明かりを灯すと闇は消える。

しかし「物体」という異物がその空間に発生した時、その影には闇が出来る。

その「物体」こそが魔を宿した人間の存在であつた。

だから魔の者は「影」を増やそうとした。

そして、その光源を絶てば世界は闇に包まれる。

そういつた戦いを神と魔は数万年に渡って繰り返してきた。

その「光源を絶つ力」こそがネフィリムの完全復活であった。

何故ならネフィリムは神魔融合の成果物だからである。

その為の周到な準備を、サタンは長い年月を掛けて構築してきたのだった。

そして今、その計画が顕在化する。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3408c/>

---

ASUKA ~ 鎮魂のノワール

2011年10月22日06時19分発行